
とある未来の可能性

神苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある未来の可能性

【Nコード】

N4902X

【作者名】

神苑

【あらすじ】

この広い世界には、幾千、幾万の人がいて
そしてそれ以上に、たくさんのお出会いと別れがあつて
これは、小さな事件とお出会いから始まるお話。
少年は出会い、気づき、そして知ることになる。
自分が居るべき場所、居たい場所。
少年はどんな居場所を選択するのであろうか。

第0箱（前書き）

注意点

『とある魔術の禁書目録』及び『とある科学の超電磁砲』ではない。

オリジナルの間は文字数とか気にしてはいけない。

三人称練習作品。

不定期投稿。

第0箱

二年一組。そこは個性が無いことが個性のような、没個性たちが集められた教室だ。突出した才能があるわけでも、平均的に優れているわけでもない。

そんな彼らの中にそいつは居た。

そいつは真面目さをアピールしているのではないかと疑うほどに制服を崩すことなく、きちっとネクタイを襟元まで締めている。行儀よく自らに与えられた席に着き、次の授業に必要な教科書やノートを机の上に出し、授業開始のチャイムを待っていた。

一見すれば、理想の学生像。普通が目指す終着点とでも言っても良いのではないだろうか。そいつはそうすることで自らが普通であることを認識していた。

だけれども、何か違った。

そのことにそいつは気づきつつも、自らが行なっていることを改善しようとは思ってはこなかった。なぜなら彼はまごうことなき、普通であるのだから。

普通であるから、友達が出来なくても問題ない。

普通であるから、しゃべることがなくても問題ない。

普通であるから、誰とも接しなくても問題ない。

だけど、寂しかった。

自分が望んで得たはずの居場所であるはずなのに、自分の居場所は普通ではないと思うようになってきた。

そいつが普通に居るようになったのは、高校に入学した時からだ。自分の居場所が欲しい。

そいつはそれだけを望み、そして普通であることにした。理由は

特にない。きっと、普通に憧れたとかそんな取るに足りない理由なのだろう。

けれども、そいつは普通を否定しようとしている。

今が五月の初めであることから思うに、入学してから一年ちよいそいつが普通に捧げてきた高校生活の三分の一が無意味に消えようとしている。

「仕方ない。普通に居ることが叶わないなら、特別に行くことにするか」

そいつの言葉は始業チャイムにかき消される。

普通になり切れなかったそいつは、次の居場所を求めて動き出した。

第1箱

その日、目安箱に一通の投書が入れられていた。

「んあ？ なんだこりゃ？」

それに一番初めに気づいたのは、生徒会長から目安箱の管理を任せられている人吉善吉であった。

投書に軽く目を通し、その内容のおかしさに顔を歪ませさせる。

『二年一組の土喰^{つちく}未来をどこかの部活に入部させて欲しい』

しかも氏名の欄はおよそ30にも及ぶ部活動代表者の連名の投書であった。

格闘技系は、空手道部、ボクシング部、テコンドー部、少林寺拳法部、アマレス部、なぎなた部、骨法部、相撲部など。

スポーツ系は、バスケットボール部、陸上部、野球部、サッカー部、テニス部、ダーツ部、ボブスレー部、ボウリング部など。

文化系は先にあげた数ほどではないが、オーケストラ部、書道部、美術部などが名を連ねていた。

「おいおい待てよ。一組ってことは俺と同じ普通科の生徒のハズだよな？」

箱庭学園には大きく分けて二種類の生徒が在籍している。普通の生徒と特待生だ。本当はもう少し細分化されるのだが、大まかにはこんな感じである。

一組から九組は普通の生徒、十組以上は特待生で構成されているクラスと言った具合だ。

九組までは一般的に普通の学力であるとか普通の身体能力だとか、そんな生徒たちが所属している。

それとは反対に、特待生とは言わばエリート集団である。箱庭学園は日本全国津々浦々から数多の特待生を迎えている。学費免除は当然のこと、彼らは学園生活において各種便宜が図られている。そんなわけなので学力は元より、スポーツや芸術で認められた者たちしか所属することを許されていない。

そのことが善吉の脳内に浮かび、土喰が一組であることで違和感を生じさせていた。

「そんなに難しい顔してどうかしたかい？」

投書と睨めっこしながら唸る善吉が気になったのか、隣で生徒会業務をこなしていた書記である阿久根高貴が声をかける。

「これなんですけど、この土喰って先輩知ってますか？」

自分だけで考えてみても仕方ないと思ったのか、善吉は高貴に件の投書を手渡す。

「ん、どれどれ……」

すばやく高貴は投書に目を通す。が、やはりその内容のおかしさに眉間にしわを寄せる。

「一組の生徒か。それなら俺たち特待生とはあまり交流がないから知らないな。だけど、この投書はどついうことだろうね？」

「さあ？ 俺に聞かれても困りますよ。とりあえずめだかちゃんに報告だな。これは俺たちの手にあまりそうだ」

「それが良いかな。俺たちだけで下手に動くよりも、めだかさんにお伺いをたせた方が良さそうだ」

そうやって男二人がうんうんと頷いていると、今まで黙々と対面で生徒会業務をしていた会計の喜界島もがなが口を開く。

「二人とも、そうやって現実逃避しないで仕事してよ。あたし一人にやらせるならお金払って！」

その言葉で男二人は現実へと戻される。

机の上に積まれた書類の山。その量はあまりにも多く、ペンを動かすことが馬鹿馬鹿しく思えてくる。

それもそのはず、箱庭学園は生徒の自主性を何よりも重んじるがゆえに生徒会の仕事は多岐にわたり、膨大な量になる。さらに部活も活発で100以上あったりするので、普通なら、生徒会執行部に所属する者が4人だけでは手が足りない。

それを可能にするのが、現生徒会長のチカラであるのだが。

「……さあて、そろそろ休憩も終わりにして再開しようか人吉くん」

「そうッスね」

男どもは顔をつき合わせ、溜め息を吐きながらも仕事を再開するのであった。

第2箱

生徒会書記、会計、庶務がそれぞれの仕事を片づけていると、生徒会執行部の引き戸が勢いよく開け放たれる。一同の視線が闖入者に向けられるが、その姿を確認すると仕事へと戻っていく。あまりにやることが多く相手をしている時間がないのだ。

その光景に闖入者は頬を膨らませる。

「生徒会長である私が帰還したというのに、どうしてみんな無言で仕事に戻ってゆくのだ！」

黒神めだかの凱旋。通常時ならば、彼女に心酔する高貴辺りが元氣よく出迎えるのだが、とあることが原因でそうしなかった。もちろん、忙しかったからというのもあるのだが。

何と言って良いのやら、めだかがチアガールの格好をしているのだ。本日はチア部からの投書で彼女たちの元へ向かったわけであるから、コスプレ好きのめだかであるし、チアの衣装を着ていることについては理解出来るのだが、その手に持つバトンはクルクル回されていた。

今絡むと非常に面倒くさい。それが生徒会の面々の共通の認識だった。

「ふむ。ちょうど良いことにチア衣装を身に纏っていることだし、生徒会業務を頑張る貴様達のために応援してやることにしよう」

「って、待てよオイ！」

ダンスを開始しようとしためだかに善吉はストップをかける。律義言って良いのか、その言葉にめだかは不自然な態勢で止まってみ

せた。

「気に入らないか？」

「そうじゃねえ、そうじゃねーけど、出迎えの言葉がなかったことは謝るから、頼むから仕事してくれ！」

必死こいて業務を片づけているというのに、その横で踊りながら応援されるなんて善吉には堪えられなかった。

それに同意するよう高貴も口を開く。

「めだかさんにチアで応援されたいのは山々なんですけど、めだかさんにも仕事をしてもらわないと、今日は帰れそうもないんですよ」

めだかの業務処理能力は他の生徒会メンバーのおよそ10倍。今日やらなければならない案件はそんな彼女がやらなければならないほどに切迫していた。

そのことを高貴が説明すると、めだかはチアを踊れなかったことを残念がりながらも、自らの机に着き仕事をやり始める。片手に二本、合計四本のペンを操りながら次々と書類を片づけていつているが、その表情は優れない。

「なんて俺は最低なことを言ってしまったんだ……。いくら切迫した状況の中でも、全てはめだかさんの御心のままにと決めていたのに……」

高貴は自分が楽をするためにめだかの自由意思を奪ってしまったことに落ち込む。その内心を吐露様に小声で言葉を漏らしていることに気づかぬレベルでだ。

「仕方ないツスよ、阿久根先輩。いくらなんでも今日の仕事の量から考えるに、めだかちゃん抜いた三人だけでやってたら、本当に帰れるか心配になるし」

今日は部活関連の備品についての申請が多く、さらに校内美化についての書類も重なり、普段よりも断然書類が多かった。それは各部活が少し前に行われた部活動対抗水中運動会で獲得した予算で、新たな備品を購入するにあたって申請をかけているから他ならないのだが。

「ま、これは今日の帰りにでもめだかちゃんに確認してもらおうか」

善吉は制服のポケットに件の投書を入れると、仕事に戻るのだった。

第3箱

目安箱。第九十八代生徒会長黒神めだかが生徒会選挙の時に掲げた公約の一つである。生徒の間では『めだかボックス』と呼ばれ好評を博しているようだ。投書とは設置された目安箱に投函された言わば要望書のことである。

元ネタは江戸時代の1721年に徳川吉宗が設置した目安箱である。目安とは訴状のことであり、政治・経済から日常の問題まで、町人や百姓などの要望や不満を人々に直訴させた。本家の方は投書には必ず住所・氏名を記入しなければ、投書は破棄されるのだが、めだかは匿名性が無ければ目安箱の意味が無いと言っており、誰からの相談でも受け付けるらしい。

まあ、そんな豆知識は置いて翌日。生徒会業務の量も通常時に戻ったわけではないが、それでも昨日を比べ落ち着いてきた。だからと言って、すぐ片づけられるというわけではないが、そこはめだかが一手に引き受けていた。

そうすることによって手の空いた他の生徒会執行部の面々は、各部活の代表者のところに赴き、件の投書の内容について確認を取るようになった。

『二年一組の土喰未来をどこかの部活に入部させて欲しい』

あまりに簡潔な一文。そして、部活動代表者の名前が連ねられた投書である。この相談をする経緯や細かい内容などが一切なく、土喰未来のところに行く前に詳しい内容を確認すること、それが生徒会長からの指示であった。

格闘技系は元柔道部の高貴が、スポーツ系は部活荒らしで面識のある善吉が、文化系の部活は余ったもがなと、それぞれ分けて確認

に向かった。

そしてこれが話をまとめた結果である。

曰く、特待生でないはずの土喰未来は金の卵であった。

あまりにも簡潔過ぎるので、詳しく説明しよう。

ある日、仮入部がしたいと二年生の少年がやってきた。とは言ったものの、仮入部期間なんてとつくの昔に終わってしまったているのだ。しかも二年生だし。だけど、部員が増えれば来年度予算が少し増えるかもしれない。そんなわけで仮入部を認めただけであるが、未来は最初まったくの素人であった。しかし、軽く基本的なことを指導するとそれを乾いた地面に水を垂らす様にどンドン吸収し、その日の部活が終わる頃にはレギュラー一歩手前ぐらいまでの逸材に成長していた。これはスゴイと、入部するように勧めたが「少し考えて下さい」と帰ってしまった。その日を最後に未来はもうその部活には訪れることはなかった。

部活によって多少の違いはあるものの、だいたいこのような内容の話が生徒会の面々に聞かされた。

しかも、話を聞いていくうちに、未来は一日ごとに仮入部する部活を変えていたようである。それが原因で二代目部活荒らしという通り名がつけられたわけなのだが、同様のことをしていた善吉はそのことを聞いて笑うしかなかった。

本来なら部活荒らしについて生徒会の耳に入っても良いのだが、水中運動会の後の業務の量が多く、耳に入れる時間が無かったようだ。

部長たちは我先にと未来の元へ駆け付け勧誘を行ったが、どれも断られてしまったので、「こうなったらみんなが目安箱に投書だ!」という運びになったようである。そんなこんなあつての連名での投書であった。

「ほう。なかなか面白そうな奴じゃないか」

めだかは生徒会からの面々が集めてきた情報を聞き、頬を緩ませる。

「本来であるなら、部活動に所属するかは生徒の個人意志によるものでなければならぬと思うが、それが生徒の悩みならば仕方があるまい。私が見事解決してみせようぞ！」

いったい、この自信はどこから湧き出してくるのだろうか。そんな疑問が浮かんでくるが、黒神めだかはそういう人間だとしてか答えようがない。

ゲームで言う、ステータスがカスタムしたチートキャラ。それがめだかだ。しかも、新たらしいこともどんどん吸収して自分モノにしていくので、質が悪かったりする。

こうしてめだかと未来の初邂逅の舞台は整った。

出会いの先に何が起こるのか。それは舞台を作成する者しか知るよしもない。

第4箱

放課後。未来は一人さびしく二年一組の教室に残って教科書を開いて自主勉強していた。教科書と言っても普通科でいつも使っている教科書ではなく、特待生が所属する特別普通科の教科書であるわけだけだ。

なぜそんなことをしているかと問われれば、特待生になるために必要な知識を自らの脳内に貯め込むためだ。

今まで未来は普通で在り続けようと務めてきた。だから、学力は普通以上にあるわけでも、普通以下にないわけでもない。ならば、特待生になるためには勉強して学力を上げなければならぬ。

学力以外の運動能力や芸術性については様々な部活に仮入部したことで、だいたい身についたので、残すは学力だけだった。

一学期終了間際の七月末に、特待生になるための昇格試験が控えている。そこで学力、運動能力、芸術のどれかの才能を学園側に認めさせれば、見事特待生の仲間入りである。もっとも、その制度を利用して特待生になることが出来たのは箱庭学園創立以来、片手で数えるほどしかない。だからこそ、保険の意味を込めて未来は全ての試験を受けるつもりでいる。

「ふう、今日はこのぐらいで止めておくか」

開いていた教科書を未来は閉じ、勉強に使っていたものをカバンの中にしてしまう。だが、使用していた教科書は机の上に置いてあるままだ。これらの教科書はカバンに入り切らないので、学園の自分専用のロッカーにしまうことにしている。

さて、しまいに行こう、と未来は立ち上がるうとした時、オレンジ色の陽射しが差し込む教室の引き戸が開け放たれた。

「ん？」

今は放課後であり、他の生徒たちは部活動で残っている生徒を除いて帰宅しているはずだ。もしや、部活動の帰りにクラスメイトの誰かが忘れ物でも取りに来たのではないかと未来は考えたが、教室に入って来た顔を確認すると考え違いだったことに気付いた。

改造しているのか、胸元を大胆に開いた黒い生徒会専用制服を着込んだ生徒会長を筆頭に、同じく黒い生徒会専用制服を着た男二人に女一人の合計四人。彼らは生徒会のようだ。

そんな彼らを見て、何か二年一組の教室に問題があるのではないかと思い、未来は立ち上がるのを止め、口を開く。

「こんな普通の教室に何か用ですか？」

あまりに普通過ぎる教室。未来が教室を見渡す限り何の問題もないはずだ。

「まさか本当にこの時間まで教室に残って勉強をしているとは。これは私たちも見習って、生徒会業務時間の延長を考えるのもいいかもしれないな」

「止めてくれよ、めだかちゃん。これ以上業務時間が増えたら俺たちが参っちゃうよ」

「と、人吉くんは言ってますが、俺は賛成ですよめだかさん！」

「カツ！ それなら阿久根先輩が一人残ってやればいいーじゃないですか」

「何か言ったかい、人吉くん！？」

「いえ、何でもありませんよ！」

生徒会の男二人が視線で火花を散らせ始めた。

「あたしは別に……どっちでもいいかな。でも、競泳部に割ける時間が減っちゃうのは困るかも」

そんな中でも、もがなはマイペースに自分の意見を言う。

「ん？」

彼らは何をしに来たんだ？ 質問の答えも返ってこないし、これは帰っても良いのだろうか？

そんなことを未来は思い始めるが、めだかが待ったをかける。

「すまないな、土喰二年生。普段はもっと落ち着いている奴らなんだが、時折、こうなってしまうのだ」

「いえ、全然構いませんよ。ところでなぜオレの名前を？ 二年一組の教室に用があるんですよね？」

「うむ。実は、こんな投書が届けられてな」

めだかは未来の席の前まで行き、件の投書を手渡す。

未来はその投書に目を通し、状況を把握する。

「なるほど。彼らはめだかボックスを利用することにしたんですね」

「そうなのだ。我々は目安箱への投書に基づき、生徒会を執行しに

きたわけだ」

「とは言われましてもね……うーん」

アゴに手を当て、未来は部活動について考えてみる。

その様子を見て、もがなは男二人を放っておいて補足するように判断材料を言う。

「生徒の部活動参加は基本的に自由ですし、嫌なら嫌と言ってくれれば、あたしたちのほうで彼らにはちゃんと説明しておきますよ？」

当り前のことだが、生徒を強制的に部活動に従事させる事は出来ない。そのことはすでにめだかの方から生徒会メンバーに言っている。

だから未来が嫌と言えば、めだかは彼の意見を尊重して、部活動代表者たちに説明に回ることになるだろう。

未来の目的はあくまで特待生になること。だからその確率を少しでも上げるためにこうして勉強をしているわけであるから、それが別に部活動によって確率が上がることになっても構わないのだ。

端的に言えば、どっちでも良いというわけだ。だったら、なぜこれまで勧誘を断って来たかと言うと、必要な学力を身につけたかったから。今となっては、だいたい身について来ているので、少しずつらい時間を部活動に割いても良くなった。

しばらくの間、考え込んで考えをまとめると、未来は一つの案を思いつく。

「たしか、生徒会長は就任演説で誰からの相談も受け付けるって言いましたよね？」

「そのとおりだ。相談内容は問わん。学業・恋愛・家庭・労働私生活に至るまで、投書は24時間365日私は受け付けている」

「でしたら……」

未来はカバンからペンと紙を取り出し、すらすらと文字を書いてゆく。

「オレからの投書も受け取ってもらえますよね？」

「もちろんだとも！ 私は歓迎するぞ！」

第5箱

目安箱への投書の案件を一つ解決するたびに置かれる花で溢れかえりそんな生徒会室。生徒会長であるめだかはこの花を学園いっばいに咲き誇らせることが夢らしい。

今、新たに二輪の花が加えられようとしている。

「ということ、新しく副会長（仮）に就任することになりました二年一組土喰未来です。あくまで副会長（仮）ということなので、短い間かもしれませんが、それでも精一杯副会長（仮）としての責務を全うしたいと思います。これからよろしくお願いします」

未来がめだかに投書を手渡した翌日。めでたく彼は生徒会執行部副会長（仮）に就任することになった。大事なことなので繰り返すが、副会長（仮）なのである。

頭を下げて、新参加者としての挨拶をする未来に善吉は驚きの声を上げる。

「ちょ、これはどういうことだよめだかちゃん!？」

「どついうことだよ、どついうことだよ?」

「なんで後から入って来た土喰先輩の方が俺よりいい役職についてるんだ? あくまで仮入部なんだろ!？」

そう、あくまで未来の生徒会加入は仮入部なのである。

昨日の投書の内容を簡単に説明すると『生徒会に仮入部させて欲しい』と言うモノだ。その未来の相談と部長連名の相談を加味した上で、めだかが考えて未来の生徒会副会長（仮）就任が決まった。

部長連名の投書はあくまで土喰未来を部活動に入部させることなので、生徒会執行部に仮入部させるといふ形での決着だ。

「そうはいつでもね、人吉くん。生徒会で空いていた役職が副会長しかなかったんだ。仮入部とは言え、彼がそこに納まるのは当然のことだよ。ですよね、めだかさん！」

「うむ。そういうことだ。本当のところ、生徒会執行部副会長には私の対抗勢力になりえる存在に就いてもらいたいのだが、いつまでも副会長役職を空席にしておくわけにはいかないからな。土喰二年生には、最適な人材が見つかるまでの期間、副会長（仮）として活躍してもらうつもりだ」

めだかは暴君であれこそすれ、独裁者になるつもりなど毛頭もない。だから、副会長には対抗勢力となる存在でなければならぬと考えている。

しかし、現実はそのもいかない。副会長不在では生徒会則第2条に違反してしまうので、早急に副会長を任命する責任がめだかにはあった。

理想としては自分の対抗勢力を、とめだかは今も考えているが、ちよつど未来が生徒会に仮入部したいと相談してきたので、これを受諾。めだかの眼鏡に合う最適な人材が見かるまで未来を副会長（仮）として任命することにした。もちろん、働きの如何によっては（仮）を取って、正式に副会長として任命するつもりだ。

「カツ！ そういうことなら仕方ねえ。よろしくお願いしますよ、土喰先輩」

「こちらこそよろしくお願いしますね、人吉君」

「あたしもよろしく願います」

「俺からも、よろしく」

「はい、よろしく願います」

未来は、善吉に続いてもがなと高貴とも挨拶を交わす。

彼の左腕につけられている腕章は『副会長（仮）』なのである。他の生徒会メンバーと交友を深めるのは当たり前なのだ。

「働きに期待してるぞ、土喰副会長（仮）」

「もちろん。副会長としての適任者が見つかるまで頑張らせて頂きますよ」

こうして、土喰未来は生徒会執行部に加入した。くどいようだが、副会長（仮）としてだ。

なぜ彼は生徒会に仮入部しようとしたのか。それは後々明かされてゆくだろう。

とにかく今は、土喰副会長（仮）が誕生したこと。その事実が重要なのだ。

喜界島ればーと？

あたしが競泳部と掛け持ちで所属する生徒会執行部に新たなメンバーが就任した。

土喰未来。あたしの一年先輩で、阿久根先輩と同学年の二年生だ。それと同時に人吉君と同じく普通科の生徒なんだって。

だけど、土喰先輩はともではないけど、あたしの目には普通科の生徒には見えなかった。

それがわかったのは土喰先輩が副会長（仮）に就任した次の日。あっ、副会長（仮）っていうのは、仮入部だからって土喰先輩が自分で新しい腕章を作ってきた。だから今も黒神さんの左腕には会長と副会長の腕章がその姿を主張している。

それで……って、そうそう話戻すけど、土喰先輩はあたしたちの想像を超えるぐらいすごい人だった。

人吉君と同じ部活荒らしをして、しかも仮入部した部活からは期待の新鋭みたいに勧誘されるわけだから、身体能力がすごいことは元々わかってただけ、土喰先輩本当のすごいところはそんなことではなかった。

物覚えのスピードが尋常ではないのだ。黒神さんほどではないにしても、副会長（仮）に就任した日に教えたことを次の日にはほぼ完璧にこなしていた。その日に教えたことも、その日の内にほとんど自分のモノにしてたし。

これは明らかに異常だ。

「さつきからオレを見てるようだけど、何かオレ不味いことしたかな喜界島さん？」

「あっ、いえ、そんなことないよ先輩！」

うう、人吉君の時もそうだったけど、どうして私はこう面識の
あまりない人と生徒会室で二人つきりになっちゃうのかな……？

別に嫌なわけではないけど、むしろあたし的には学年は違えど友
達を増やせるチャンスだから良い機会のはずなんだけど、口下手な
自分が邪魔してそう上手く事は運ばない。

人吉君の時みたいに、何かきっかけがあればいいんだけど……。

「それじゃあ何かな？ なに、親睦を深めるためだ。今なら訊かれ
たことに何でも答えるよ」

土喰先輩はあたしの考えを読むように優しく話しかけてくれた。

たった一年かもしれないが、それでも人生経験の違いなのか、微
笑みながらあたしの言葉を待ってくれている。

「あ、あの……じゃあ、どうしてあんな投書をしたんですか？ わ
ざわざ生徒会に入らなくても、土喰先輩ならどこの部活でも実力を
発揮できそうですよ？」

土喰先輩の生徒会に入った目的は知っている。生徒会業務を通し
て自身の実力を理事会に示し、特待生になるための試験を有利に運
ぶためだとか。それは土喰先輩が副会長（仮）に就任した時の挨拶
で聞いた。

ただどあたしにはそれが本当の理由ではないように思えてならな
い。根拠があつてのことでもないし、読みが外れている可能性の方
が高いと思うけど。

「そうだね。たしかにオレならどこか適当な部活に入部して、そこ
で実力を発揮して特別体育科狙うって選択肢の方が良いかもしれな
いね」

あつさりと認める土喰先輩。これは自分に自信がないとできないことだ。

そして「でもね……」と言葉を続ける。

「黒神めだかに興味が出た……つてのが一番表現として近いかな。喜界島さんや阿久根君よりも上の特待生が所属する十三組。一応、予習を兼ねて観察しておこうかと思ったんだよ」

特待生の中でも更に選ばれた特待生。今もなお普通科ではないこの人の目には、それすらも観察対象でしかないらしい。

たしかに十三組の生徒は登校義務さえ免除されているから、ほとんど学校に来ていなく、登校しているのは黒神さんくらいだ。

だけど、土喰先輩の言葉を聞いて、あたしの中でフツフツと何かが湧きあがる。

屋久島さんや種子島さん、それにあたしの友達がいる特別科を馬鹿にされているように感じた。

「特別科を馬鹿にしないで！」

自分の中のモノを押さえきれなくなつて暴発してしまう。

言葉に出してから、やつちやた……、と後悔が生まれた。

ケンカしたいわけではないのに、それよりも同じ生徒会役員として親睦を深めたいのに、あたしってどうしてこうなつちやうのかな

……。

あたしの叫びを聞いた土喰先輩が、ぼけーっと、あたしの方を見ている。

嫌われちゃったのかな？ はやく謝った方がいいよね？

あたしの中で様々な思考が飛び返すが、どうにも行動に移せない自分がいた。

「ハハツ、フフフフ……」

何に堪え切れなくなったのか土喰先輩が急に笑い出した。

「ああ、ごめんごめん。別にオレは特別科を軽視しているわけじゃないよ」

「え？ それはどういう……」

「オレはさ、自分の居場所を見つけたいんだ。だからこそ、様々な人材が集まるこの箱庭学園に入学した。だけど、普通ノーマルはオレの居場所じゃなかったらしくて、次は特別スペシャル。それで特別でも駄目だったら更にながオレの居場所かもしれないだろう？」

黒神さんの観察はその下見でしかないよ、と土喰先輩は笑いながら付け加える。

「だからさ、オレの観察対象は黒神さんだけではなく、阿久根君や喜界島さん……君でもあるんだよ。それに、一度は違つと判断したけど、普通科に所属する人吉君もいるしね。この学園に存在する三種類の選択肢が揃っているのは生徒会と風紀委員会しかなかったから」

「あ、あたしも!？」

「うん。期待してるよ？ 特別はすごいんだろう？」

そう言いながらニコニコ笑う土喰先輩は、どこか掴みどころのない人で、何かが欠けているように思わせる人だった。

あとで屋久島さんと種子島さんにこの人のことを相談してみよう。

あたしだけじゃ、土喰先輩のことを考えてみるのは難しそうだ。

喜界島ればーと？（後書き）

補完の意味を持たせて、ほぼヤツツケ気味書いてみました。

喜界島もがなの一人称と言うことで、「これでいいのかわ？」と思いつながら書き上げましたが、果たして彼女らしさはでていたのでしょうかね？

ちなみにですが『喜界島ればーと？』となってますが、続くかは未定。

次話から原作に入るので、文字数が増加すると思います。
それに伴い、完全に不定期投稿になります。

第6箱

「一体！ 何を考えているのですか、生徒会は！！」
あなたたち

未来が副会長（仮）として生徒会業務に携わるようになってからしばらくたち、六月も終盤。役員たちが業務を片づける中、生徒会室に一人の少女の怒鳴り声が響いた。

少女の名前は鬼瀬針音。鉄拳制裁を信条に持つ、メガネとツインテールが良く似合う風紀委員の少女だ。

そんな針音が怒鳴り声を上げている理由はもちろんのこと所属風紀委員としてのモノである。

「生徒の範たるべき生徒会役員が！ 一体どんな魂胆があつて、率先して風紀を乱してやがるのです！？」

めだかに抗議するように、生徒会長専用の机をバンツと叩く。それから針音は生徒会室の住人を順番に見渡す。

「人吉善吉くん！ どうして制服の下にジャージを着ているのですか！ まさかオシャレのつもりじゃないですよね！？」

「いや、そろそろ俺に時代が追いついてきたかと……」

善吉はお母さんに叱られた子供のように頭を？く。

「阿久根高貴さん！ たとえ、あなたがエルヴィス・プレスリーの熱烈なファンだったとしてもその大胆さはありえませんか！！」

「正面から怒られたら、さすがに返す言葉はないな……」

上半身裸の上に生徒会専用の制服を羽織る形で胸元を露出させている高貴は、針音の正論に冷や汗を流す。

「そして、そのソロバン弾いてる人！ もとい喜界島もがなさん！ あなたは何を『あたしには関係ない』なんて構えてやがるのです！？」

「だって、あたしには関係ないもん。あたしは改造制服なんてしてないし、スカートもフツートの長さだよ？」

なんで自分にまで追求が及ぶのか理解できないようすのもがな。だが、針音は追求を止めることはない。

「は！ あ~~~~ん？ そんなこと言っても私の目は誤魔化されませんよ!？」

針音が手錠をメリケンサックのように持ち構えると、次の瞬間にはもがなの制服は脱がされ、その下から競泳用水着が姿を現した。

「!?!」

ある意味もの凄い技術である。もしもこの脱衣術が犯罪者の手に渡ってしまったら、それだけで女性は日々を恐れながら過ごさなくてはならなくなると言っても、なんら問題ないレベルの凄さだ。もがなは顔を真っ赤に染める。

「ほおーら！ あなたが中に水着を着込んでいることぐらい、私の風紀眼にはお見通しなのです!?!」

しかしもがなも負けてはいない。

「フツ、よくぞ見抜いた……。今のはお前を試したのだ！」

ぼふっ、と更なる高みから針音の頭に手を載せて、精一杯の強がりと言った。

「まったく！ 生徒会で唯一まともに制服を着ているのは土喰未来さんだけじゃないですか！ 生徒会がこんなのでは風紀が乱れます！ ただちに着替えて下さい！！」

と、言うことで、唯一まともだった未来を除いた役員たちは渋々ながら着替えることになった。

喜界島が着替えることになるため、男性陣は廊下でのお着替えとなる。

「畜生……まだ時代が俺に追いついてこないか……」

「ああ、せつかくめだかさんをリスペクトしていたのに……」

「フハツ……まあまあ二人とも。どうせもうすぐあの風紀委員の子もどこかに行くんだ……フフフ。それからまた着替え直しても良いじゃないか？」

笑いを堪えながら未来は無責任なことを言う。善吉と高貴は、こんな奴だったか？ と思いつつも、これはきつと打ち解けてきた証拠であり良い傾向だと思い、気にしないことにした。

しばらくもがなの着替えを待ち、生徒会室に入り業務を再開する。もがなの着替えの時間がかかったのは、一度制服を脱いでから水着を脱ぎ、それからまた制服を着直したためである。

そして、業務を再開したはずなのだが明らかに空気が重い。
男性陣は先ほど言っていた理由でやる気が起きないようだし、も
がなに至っては水着を着ていないから力が出ないらしい。

「すみません、鬼瀬さん！ 水着だけになるというのはダメですか
？」

手を挙げ、水着も制服ですし、ともがなが発言するが、針音はす
ぐさまそれを拒否した。

その様子を見てから今まで沈黙を守っていたためだかが口を開く。

「肅清は終わったか？ まあ、その辺で許してやってくれ、鬼瀬同
級生。みな決して悪気があったわけではないのだ」

自らが長として、部下を守る言葉を吐くめだか。それに感動した
のか針音はぺこぺここと頭を下げる。

「あ、いえ、生徒会長！ こちらこそ職務中にお邪魔しました！
それでは、これで失礼させていただきます！」

「うむ！ 委員長によろしくな！」

別れの挨拶をし、針音はすたすたと生徒会室を後にしようとした
が、これまたすたすたと戻って来て、生徒会長専用机を手錠のメリ
ケンサックで殴り付けた。

「って、そんなわけないでしょーっ！！」

当り前である。針音が肅清しに来たのは生徒会であるのだ。生徒
会長を特別視するわけではない。

ビシッ、と針音はめだかに向けて指を差し向ける。

「一番問題なのはあなたです、生徒会長！ その恥ずかしい制服以上の悪気が、この世のどこにありますか！」

「恥ずかしい？ ふむ。また随分と的外れなことを言われてしまったものだ」

まったく自身の悪いところに気づいていない……いや、気づいているのだろうが、それでもめだかは凜と胸を張る。

「この黒神めだか。己が肉体に恥じる個所などひとつもない!!」

清々しいまでの悪気のなさである。一連の会話が絡み合っていないことに、こんな状況でも事の成り行きを見守りながら業務を片づけている未来を除く生徒会の面々は言葉を無くした。

その後も、なんとか胸元の露出を止めさせようとする針音と、自分の肉体美に自信を持つめだかの押し問答が続いた。

その時の会話で判明したのであるが、めだかは任期中に自分と同じ胸元を露出させた制服を箱庭学園の女子の制服として統一させたいらしい。双子山を聳え立たせている女生徒ならばまだ良いかもしれないが、平原が続くような女生徒には残酷な話である。

「とにかく、あなたも着替えてください黒神さん！ それとも着替えたくない合理的な理由でもあるんですか!？」

ついに痺れを切らした針音は高貴の時と同様、正論で攻めることにした。

それにめだかは一瞬思考を廻らせるとキツパリと宣言する。

「とにかく嫌だ！」

言い訳にすらなっていないかった。理由もヘツタクレもない、ただの拒否を告げる言葉。学園の代表者である生徒会長として本当にそれで良いのか、と疑問を持ってしまふレベルの返答である。

これには怒りと通りこして呆れもまた通りこして、針音は彼女の武器である手錠を手に生徒会室中を暴れ出した。机や椅子などをバキバキに粉碎し、積み重ねていた書類を巻き上げ、もう手がつけられない。

そして生徒会室に壊せるものがなくなってようやく針音は生徒会室を後にした。廊下から破壊音が響いてくるあたり、まだまだ怒りを発散しきれていないようだ。

「あーあ。掃除しないとな」

こんな中でも真面目かどうかを抜きにして一人業務と格闘していた未来はそつと溜め息を吐いた。

生徒会に仮入部して初めて気づいた生徒会の忙しさ。このままでは特待生になるための試験までに勉強が間に合わないかもしれないと最近になって危惧してきた。だから出来る限り仕事を早く終えて勉強の時間を確保したかったのだが、針音が余計な手間を増やしてしまったので溜め息を吐いたのだ。

針音を追って行ってしまった善吉、針音について話し込むめだかと高貴を尻目に、未来はもがなと惨状と化した生徒会室を掃除し始める。もがなもこの後、気分転換を兼ねてプールで泳ぎたい気分になったようなので、二人してせつせと机や椅子の残骸である木片を集め、焼却炉に持っていくことにした。

「あと五週ぐらいする羽目になりそうだね」

残骸の量はとてもではないが一度に運べる量ではなかった。しかも運び終わったとしても今日片づけなければならぬ業務がまだ残っている。散々な日だ。

「早く泳ぎたいよ〜っ！」

もがなの悲痛な叫び。だが、現実はその甘いものではなく、彼女が全てを終わらせプールへと入水出来たのはこの叫びから一時間半後であった。

二日後。いつもと変わらず、キッチリと三十分前に箱庭学園の校門を通る未来であったが、その視線は前を向いておらずある一点を凝視しながら顔の向きをだんだんと曲げていった。

その視線の先には『学園風紀徹底週間』の看板とともに、針音が登校してくる生徒の風紀に乱れがないかどうか確認している姿があった。

だがおかしな点が一つ。何故か針音は風紀委員会専用制服ではなく、未来と同じ生徒会専用制服を着ているのだ。しかもめだかが着用している胸元が空いている露出度強化版である。

気でも狂ったのかと思ってしまうが、針音はあまりの恥ずかしさにプルプルと震えていた。

「なにがどうしてこうなっただんだ？」

そんな疑問が頭の中を過ぎつつも、特に自分とは関係ないと判断した未来はスルーを決め込んで今日も元気に登校するのであった。

第7箱

「そこ違うよ、土喰先輩」

「ん、どーが？」

「ここです。ここの計算を間違えてるよ。お金は大切なんですから、いくら先輩であろうとも間違いは許しません！」

「あはは、ごめんごめん」

「もう、今度予算関係で間違えたら罰金ですからね！」

隣同士で座って、仲睦まじく生徒会業務を片づけていく未来ともがな。

そんな彼女を見て善吉と高貴は小声でヒソヒソ話に興じていた。

「いつの間にあんなに仲良くなったんですか？ そこら辺、何か知ってます？」

「さあ？ 俺もよく知らないな。でも、仲が良いことは土喰くんが生徒会になじめている証拠じゃないか」

それでいいじゃないか、と善吉が余計な詮索するのをさり気なく止めさせる高貴。実のところ、高貴の中では未来ともがなの関係はもう少しで恋人に発展しそうな風に捉えていた。

しかし、実際のところ、別に二人は異性と好き合っているわけではなく、生徒会のポジション的に仲良くなったというのが一番近い。未来が生徒会に仮入部するまでは、天上天下唯我独尊のごとく他

人を助けるために常に突き進む黒神めだか。そして、そんな彼女を追従ように人吉善吉と阿久根高貴が付き従い、それから一步開けて喜界島もがながついていつているような生徒会の関係性だった。

そして、そこに生徒会を觀察しようとする未来が入るとなると、彼のポジションは自然と後方のもがなの隣に来るわけで、自然と二人は会話をすることになり、信賴関係を築く結果となった。

そのことを知らない善吉は頭にハテナマークを浮かべ、勘違いしている高貴は二人の中の進展を応援しているといった具合だ。

本日まで終わらせなければならぬ業務がほとんど片付いたところで、そのタイミングを見計らっていたように生徒会室の引き戸が開け放たれた。力の加減なんて一切考えてなかったようで、バンツ、と大きな衝撃音が響いた。

「ひつとよしー 早くかえろー！」

しかし、引き戸を開けた者はそんなこと知ったことではないと言うように善吉の元へと駆け寄る。

「ほらほらー、仕事終わったんでしょ？ 今日の買い食いはタコ焼きで決定してるからそこんところよろしくー」

ニカツと善吉に早く帰ろうと急かすのは不知火半袖。この箱庭学園の理事長の孫であり、ロリっ娘である。

アホ気を躍らせながら机をバンバンと叩く半袖を見て、善吉は溜め息を吐く。

「しっかたねーな。めだかちゃん、先帰るわ」

「うむ、気をつけて帰れよ。それじゃあ、私もこれが終わったら帰宅することにしよう。他の皆も帰っていいぞ」

めだかは書類に走らせるペンを止めることなく、解散宣言をする。

「それじゃあ、あたしはこれで」

「お疲れさま」

「めだかさん、お疲れ様です」

それぞれが自分のやっていたことの後片付けをしてから、続々と生徒会室から出ていく。

未来は自分が新参者と言うことを理解しているので、他の皆が帰宅するのを待つて再度生徒会長たるめだかに帰りの挨拶をする。

「お疲れさま、めだかさん。あなたはまだ帰らないのですか？」

「ああ、まだこの案件が片付いていないのでな」

現在めだかがペンを走らせている書類は、明らかに先ほどまでとは違う書類。未来はそれを確認するとそつと溜め息を吐いた。

「そんな生き方していて疲れませんか？」

生徒会執行部に仮入部して以来、未来はずっと黒神めだかを観察してきた。もちろん、メインの観察対象は阿久根高貴と喜界島もがなであるが、最近の未来はもがなと接点も出来てきて、めだかをより観察する余裕がでてきた。

その観察の結果、未来はめだかが明らかに異常であると判断した。もともと、生徒会選挙の支持率が98%という有り得ない数字を叩きだしていることから、めだかの異常性を鑑みることが出来た。

そしてそれは仮入部することになり、一般の生徒よりも近くから観察することで確信に変わった。

「フツ……、私にだって疲れることはあるぞ、土喰副会長（仮）」

「なら、なぜ人助けを？」

どんな時でも、目の前で困っている生徒がいれば、その時やっている業務を後回しにしても助けていた。

そんな他人に奉仕するめだかの行動は、自分の事で手いっぱい未来には理解出来なかった。

「だがな、私は見知らぬ他人の役に立つために生まれてきた。皆が幸せになる。そのために私が疲弊したところで些末な問題だ」

未来はめだかの言葉を脳内で反芻させる。

だがやはり未来に理解出来ない。

「……ふーん。歪んでますね」

「かもしれないな。ところで生徒会には慣れたか？」

動かしていたペンの動きを止め、めだかは未来と視線を交差させた。

「ええ。みんな良い人たちで助かってますよ」

「それは僥倖だ。善吉たちも土喰副会長（仮）は物覚えが良いと言っていたぞ。では、今後とも副会長が決まるまでよろしく頼む」

「任せておいてください。オレが副会長（仮）であり続ける限り、ご期待に添えるように頑張りますよ」

第8箱

気づけば梅雨が明けて七月に入り、生徒間で夏休みの話題が増えつつある頃、普通の生徒同様そんな話を繰り広げつつも生徒会執行部は今日も業務を執行していた。夏休み前だからと言って業務が減るわけではないのだ。

めだかは音楽室の防音設備にガタがきているらしく、それに伴うオーケストラ部の大音量に対する苦情処理。高貴は手垢のせいで曇ってしまったっている窓ガラスの清掃。善吉は建てつけの悪くなつてしまった飼育小屋の修繕。未来ともがなは二人で校内掲示板にポスターを貼る作業をしていた。

「このポスターはここで良かったんだよね？」

「はい。でも、もうちょっと右にズラした方が見やすいかな」

「りょーかい」

未来はもがなの指示通りに少し右にズラしてポスターの四隅を画鋏で止め、ぐりぐりと簡単に取れないようにしっかりと差し込む。それを確認したもがなは次の掲示板の場所に未来を案内する。

「別にあたし一人でも良かったんだよ？ それもそこまで重くないもん」

「ハハツ、それをオレに言われてもねえ。こういう配役にしたのは阿久根君なんだからさ。文句なら彼に言ってくれると助かるな」

二人並んで廊下を歩きながら、もがなが視線を向けるのは未来が

抱える段ボール。その中にはたくさん入れられるように丸められたポスターが何十本も入っている。

少し前まで普通に居た未来からすればこの段ボールは意外と重いのだが、特別体育科シユウイチのもがなにはそこまで重くは感じないようだ。

これは少し身体を鍛えないと十一組は難しいかな、と考えながらも、未来は男として荷物を女性に持たせるわけにはいかないと思うついでに身体を鍛えるために持っているというのが現状だ。高貴も力仕事は男の役目と知っているからこそこの配役なのだろうが、高貴はもがなのことを理解しきれていないようだ。いや、理解していないながら「荷物持ちは男のやることだ！」という男性の性役割を意識しているのかもしれない。

どちらにしても、もがなは拗ねてしまったようなので、なんとか機嫌を取ろうと未来は話題を探す。

「そういえば、屋久島さんと種子島君は元気かい？」

一週間ほど前、二人の親睦を深めるために未来はもがなに連れられ、彼女が掛け持ちで所属する競泳部に顔を出した。そこで未来はもがなと親しい間柄にある競泳部に所属する屋久島と種子島に出会うことになった。

彼らに「喜界島もがなに手を出したらどうなるかわかってんだろうなあ？」と釘を刺されながらも、未来としてはそんなつもりは毛頭なく、せつかくプールまで来たのだからと、競泳部に仮入部というか、ひと泳ぎすることにした。

結果は言うまでもなく、全国レベルの屋久島と種子島に勝てるわけでもなかった（もとより勝負しているつもりはなかったが）。その他のレギュラーとどっこいどっこいといったところだろう。初めは全国男子の平均ぐらいの泳力しかなかった八ズなのに、その日の内にそれだけの泳力を身につけられた未来の学習能力はある意味異常だった。

そんなこともあり、何故か屋久島と種子島に未来は気に入られたようで、そこそこ仲良くなったりしたわけである。

もがなにとつて、二人は家族のような存在であり、未来が話題に出したことは正解だったようだ。もがなのテンションは上がり、屋久島と種子島の近況について元気よく話し始めた。

それに未来は適当に相槌を打ちながら、次にポスターを貼るべき掲示板まで向かう。

「ここで最後ですよ！ 気張っていきまっしょー！」

すっかりご機嫌になったもがなに苦笑いを浮かべながらも、未来はポスターをもがなに手渡す。

「ん？」

未来がポスターを貼るもがなの後姿を眺めていると、背後から嫌な気配を感じた。首だけ振り返ってみると、両手に鍵爪をつけた無表情の風紀委員の制服を着た男子生徒。しかも未来に向かって大きな鍵爪を振りかぶっていた。

あまりにも唐突なことで、未来は微動だにすることが出来ず、ただただ鍵爪の軌道を見ていることしか出来なかった。

なぜオレを？ もしや生徒会を狙って？ だとしたらオレの後は喜界島さんに？

走馬灯のようにフル回転する思考であったが、身体は硬直しておりその思考に追いつかない。

もう駄目かもしれない……そう未来が思った瞬間、鍵爪をつけた風紀委員の男子生徒は、もの凄い勢いで走ってきたためにリアリットをかまされ、リアリットをしたためだか諸共、開け放たれていた窓に突っ込んで行った

「ここ、四階のハズなんだけどな……」

明らかに人が死んでしまえる高さである。運良く助かったとしても、骨の何本かは諦めなくてはならないだろう。酷い場合は半身不随なんてのもありえそうだ。

「……？　どうかしました？」

「どうもしてないよ。それよりもちょっと用事が出来たからあと頼むね」

「あっ、ちよつと！」

もがなの返事を待たず手に持って準備していたポスターを段ボールに投げ入れると、未来はめだかが飛び降りていった窓から下を見る。そこには陸上で使われる高跳び用のマットの上でのびている先ほどの風紀委員の男子生徒の姿が。めだかの姿を探せば、対面の校舎の壁を風紀委員から奪ったらしい鍵爪とどこからか調達してきたスパイクで登っていた。どう見ても人間に出来る行動ではない。

その姿を確認してから、未来はめだかに続くように高跳び用のマット目掛け窓から飛び降りる。背後からもがなの叫び声が聴こえたが、もう遅い。未来は動きだしてしまっている。

のびている男子生徒を避けるようにマットに着地し、周りに集まっていた陸上部の面々をさらに騒がせながらも、さきほどもだかが登っていた校舎に向かう。

校舎の壁面には鍵爪とスパイクにより小さな穴が五階まで穿たれていた。さきほどのめだかの登っていった速度から考えるに、階段を使って上の階に行くためだかの姿を見失ってしまうと判断して、未来はその穿たれた小さな穴を取っ掛かりに校舎をよじ登り始める。だがやはり上履きでは登りづらく、登るのに時間が掛かってしまう。

「あっ！」

ようやく三階に差し掛かろうとした時、三階の廊下を鍵爪を着けたためだが自転車に乗って爆走している姿を見つめる。未来はすぐさま三階の窓ガラスを躊躇なく割り、校舎に侵入。廊下に残された自転車のタイヤの痕を辿るようにめだかを追う。

どうやら、めだかはまた別校舎に向かったらしく、タイヤ痕は玄関口まで続いていた。それを辿って校庭に出たは良いが、校庭ではコンクリートの部分もあつてタイヤ痕が判別しづらい。仕方ないのめだかの姿を見て騒然としている生徒たちを道しるべに未来は走った。

「はあ、はあ……。やっと追い付きましたよ」

ようやくめだかに追いついたのは更に別校舎の一室だった。ここに来るまで全力疾走だったので息を整えてから未来は言葉をかけた。この場所にはめだかの他に善吉と風紀委員の女性もいるようであるにやらキナ臭い。

「土喰副会長（仮）か。ちょうどいい、私はこれから諫早三年生にスパイクを返しに行かねばならぬのでな、事態の收拾を頼む」

未来はここまでの道のりで騒いでいた生徒たちを思い出す。いくら、騒ぎの大元が学園中を駆け回ったためだかにあつたとして、そのことで生徒たちは「生徒会長だから普通だ」と納得してしまっているとしても、生徒会として説明は必要である。

それは学園を統治する組織として当然のことだ。

「わかりました。副会長（仮）として会長命令を執行します」

すれ違い様に了承の言葉を言い、ボロボロな制服に身を包んだめだかの背中を見送ってから、未来は善吉へと顔を向ける。

「人吉君。その風紀委員の女性にしつかりと事情を聞いておいてください。オレはまだ巻き込まれただけで把握しきれていないけど、事と次第によつては風紀委員会と話し合う必要がありますので」

「え？ あ、はあ……わかりました」

いつになく真剣な未来の表情に善吉は少し圧倒されるが、その内容を頭で理解してから頷く。

「それじゃあ、オレはこれで」

そう言い残して、その場を後にした未来は放送室へと真っ直ぐ向かい、生徒会長が騒がせてしまったことについて、放課後残っている生徒たちに向け、副会長（仮）として陳謝した。

『生徒会執行部土喰未来副会長（仮）です。さきほど、学園中を生徒会長が駆け回ったことについて、生徒の皆さまを驚かせてしまつて申し訳ありません。これに伴い、破損してしまった学園設備について、後日必ず修復させて頂きます。また、苦情については明日以降、投書の形で目安箱にお願いします。個別に対応させていただきます。繰り返し返します』

未来が全校生徒に向けて放送する数分前。当初、めだかがオーケストラ部に対する苦情処理のため向かっていたハズの音楽室で、一人の少年が部下からの連絡に怒りを露わにしていた。

高等教育を施す箱庭学園に似つかわしくない小柄な体躯。それもそのはず、少年は弱冠九歳にして十三組に選抜した飛び級生であるのだから。

風紀委員長雲仙冥利。学園始まって以来のモンスターチャイルドと呼ばれる少年である。

あまりの苛立ちで冥利は部下と連絡を取っていたスマートフォンを握りつぶす。十歳の握力では到底考えられないことだ。

「あーあ。大っ好きなiPhoneがぶっ壊れちまったぜ。新型に機種変したばっかなのによぉ、誰がどう責任とってくれんだよなアコレー！」

握りつぶしたiPhoneを床に投げつけ、ガシガシと踏みつぶす。

「仲間を助けたかったんじゃないやなくて、敵味方ともに守りたかった？ 何それ？ どういう意味だよその聖者っぷり！ 神様にでもなつたつもりか？」

冥利の豹変ぶりにその場に居た同じく風紀員の針音も、そしてめだかに足止めを頼まれた半袖も啞然として言葉が出てこない。

「ただの偽善者ならテキストにいじめた後、取り込んでやるつもりだったんだけどな。そこまでイカしたモノホンの聖者だってんならゲーム感覚で殺戮してやんよー！」

苛立ちを発散するように冥利は壁を蹴る。普通ならそんな軽く蹴っただけでは壁はビクともするハズないのだが、ドンツという爆音

とともに大穴が穿たれた。

その衝撃に埃が舞い上がり、その場に居た者たちに降りかかった。

「ケケケ。なるほど、確かに防音設備に問題があったようだな。こんなプリティなお子様が軽くケツトバシタだけで大穴が開いちまうなんて、いかにも脆すぎるぜ。なあ、鬼瀬ちゃん？」

「は……はい……」

「よー、エアオツパイ。オレ、こっから出ていくつもりだけど、それも止めてみる？」

冥利は針音の返事を待ってから、今度は半袖へと言葉をかける。

「……………いやあ、あたしが任されたのはここであって、そこ……は管轄外かな？」

あまりの蹴りの威力に冷や汗を垂らしながら、半袖は自分が足止めを任されたのは扉であって、大穴ではないと言う。

「あつそ。お役所仕事ゴクローさん！」

音楽室から出ることの了承を得た冥利は、自らが開けた大穴から廊下に出て立ち止まる。そして言い忘れてたと言わんばかりに口を開く。

「鬼瀬ちゃん。ひとつ伝言頼まれて」

「え？」

「風紀委員全員に通告　全員すみやかに帰宅せよ。明日、誰かに聞かれても、自分は無関係だって言い張れるようにアリバイ作っておけ！」

一組織の長としての責任か、冥利はこれから自分のやることに對して、部下に迷惑がかからないようにするつもりのようなようだ。

「ここからは男一匹、雲仙冥利の個人的な戦争だ！！」

口角を上げ、ニヤリとした冥利の表情。これから楽しいことが起きることを知っているような、そんな無邪気な顔だ。

もしもこの世界がアニメであったのなら、ここでカットインが入り、カッコよく決まるのだが、ここは現実。そう甘くもない。

ピンポンパンポン

あとは一匹狼のごとく背中を見せつつ立ち去るだけ……であったのに、それを阻むように放送を告げるチャイムがそれを邪魔した。気まずい空気がその場に居た三人を包んだ。普通ならここで腹を抱えて笑いだすはずの半袖も身の危険を感じてだんまりを決め込む。

『生徒会執行部土喰未来副会長（仮）です　』

平淡な声な陳謝の言葉が校舎に響く中、冥利は無言で校舎を殴りつける。さきほどの音楽室の壁同様、爆音とともに大穴が穿たれ、外から入ってきた風が巻き上がった埃を吹き飛ばす。

そして振り返って一言。

「許さねえ！　せつかく人が気持ちよく決めたってのに、どうしてこう邪魔してくれるのかねー？　黒神めだかのついでで捻り潰して

せんよー!

第9箱

今回の騒動の発端は、生徒会執行部と風紀委員、それぞれの仕事
がバッティングしたことからは始まったようである。その仕事とは、
めだかが担当したオーケストラ部の騒音問題であるのだが、わりと
その辺りの事情はどうでもよかつたりする。

大事なのは、それぞれの組織の苦情に対する解決方法であり、そ
れと同時に長の主義の違いでもある。

めだかが花を育てる側とするならば、冥利は芽を摘む側。鏡合わ
せのように真逆なのだ。

話し合いでわかり合おうとしためだかであったが、それを冥利が
一方的に敵対。そして今回の騒動の決定打になったのは、冥利が生
徒会を潰すために風紀委員会から刺客を三名放ったことだ。

めだかが学園中を駆けまわったのは、その刺客と生徒会メンバー
双方を守りたかったからである。

「なるほど。これは理事会に風紀委員会の蛮行を報告すれば良いの
ですかね？」

事情を聞いておくように命令した善吉と、騒動の中心人物である
めだかの話を聞き終え、あくまで未来は機械的に自分の考えを吐き
出した。箱庭学園生徒会役員として、校内の暴力沙汰から目を逸ら
すことは出来ない。

だが、そんな未来の意見にめだかが待ったをかける。

「まあ待て、土喰副会長（仮）。たしかに雲仙二年生の正義やしすぎは困つ
たものだが、まだ話し合いで解決できるレベルであろう。早急な決
断は良くないぞ」

「早急な決断って……刺客を差し向けられたんですよ？ それでも早急と言えるのですか？」

「双方、どちらにも犠牲者は出なかったじゃないか。それは最初から何も起こっていなかったのとさして変わらん。ほら、まったく問題ないだろう」

確かにめだかの言う通り犠牲者は出ていない。だが、風紀委員長から敵意を向けられているのは間違いなく、この先何が降りかかって来るかわからない。特に直接的な戦闘能力があまりないもがなのことを考えれば、早めに対処すること自体は選択肢として正解であろう。

だが、それさえもめだかは何とかするつもりだと言うのだ。自分一人を犠牲に……いや、本人は犠牲とすら思っていない可能性が高い。

「確認ですが、それは生徒会長としての判断なんですね？」

「もちろんだ！ 私は判断を曲げるつもりはないぞ！」

それならば仕方がない、と未来は自分の意見を取り下げる。それが方針ならば、組織の一員として従わなければならない。

今の居場所は生徒副会長（仮）であるのだから。

「ふむ。だが、用心しておくにこしたことはないな」

これを見てくれ、とめだかは小さな玉をみんなに見えるようにポケットから取り出し、善吉に手渡す。

「……？」

「なんだこのボール？」

いきなりそんな物取り出してどうしたんだろ？　と言うのが生徒会面々が思った事だった。

その疑問に答えるように、めだかはキリリと口を開く。

「否！　ただのボールではない。スーパーなボール。つまりスーパーボールだ！」

めだかは善吉からスーパーボールを返してもらつと、啞然とする生徒会の面々に説明を始める。

「まあ、そんな顔をするでない。私はこれでも真面目な話をしているのだ。先ほどの土喰副会長（仮）の発言は皆を心配してのことだろう？」

「ええ、特に喜界島さんが危険かと思ひまして。後でやり返すにしても、先にやられた分はどうしようもないですからね」

「だから、先に風紀委員長雲仙二年生が扱う奇妙な術の正体を教えておこうと思つてな。敵の手の内を知つておれば、他の者が喜界島会計をサポートできる。これなら問題あるまい」

言外に委員長以外の風紀委員は雑魚と言っているように聴こえてこないこともないが、それよりも自分のことを話題に出されて、もがなはワタワタし始めた。

もつとも、それさえもスルーして、めだかは説明を続ける。

「一般生徒の間では、軌道の変な正体不明な飛び道具と噂されてい

るようだが、このスーパーボールこそがその正体だ！」

「はあっ！？ 風紀委員長の武器がスーパーボールだったのか！？」

「うむ。十中八九間違いないだろう」

声を張り上げて驚いている善吉はもとより、高貴も未来までも顔には出さないけれど内心驚いていた。もがなはワタワタしっぱなしである。

そもそもスーパーボールは武器として、ちゃんと成立するのであるだろうか？

「たかがスーパーボールと侮るでなかれ、こいつの反射力・反発力は大したものだぞ」

その言葉を証明するように、めだかは指先にチカラを溜め、スーパーボールを弾く。

「ほら、このように指で弾くと壁という壁に跳弾して」

細い指から弾きだされたスーパーボールは、銃口から放たれた弾丸のようなスピードで生徒会室を縦横無尽に飛び回り、破壊を撒き散らした。

これには先ほどからワタワタしていたもがなも頭を守るように抱えてしゃがみ込むほどだ。

「……な？」

言った通りであろう？ とでも確認するように、めだかはスーパーボールが止まるのを待って善吉に視線を向けた。

「『な』じゃねーよ！」

それに善吉は怒鳴り声で返すが、一人だけ拍手をしている存在がいた。

頭を抱えてしゃがみ込んでいるもがなではなく、精一杯スーパーボールから逃げて息を乱している高貴や未来でもない。もちろん、怒鳴り声を上げた善吉でもないことは明白だ。

パチパチパチという音源へとその場に居た者たちの視線が殺到する。

「いやー、お見事お見事！一年以上そのテクでやってきたけど、タネを見抜いたのはテメーが初めてだぜ、黒神！」

拍手していたのはボサボサした髪の毛に小柄な体躯の少年。そう、彼もまた話題の中心人物である。風紀委員長雲仙冥利。生徒会に死角を送り付けた張本人である。

いつの間に生徒会室に入ってきたのか、いきなりの登場に驚く生徒会の面々を面白そうに見つつ、冥利は自分の入ってきた引き戸の鍵を締める。

「もちろん、ただのスーパーボールじゃ話になんねーから、素材に気を使ったりなんんだり、武器になるようそれなりの改良は施してあるがね。ま、でも、正体が割れたらそれで終わりな子供だまじだよ。言うなら手品なみてーなもんだ」

聞いてもいないのに、自分の手の内を明かし終えると、冥利は袖口から色鮮やかな小さな球体を大量に生徒会室にばら撒いた。まるで、敵意はありませんとでも言うように。

誰もが押し黙る中、最初に動き出したのは未来だった。

すたすたともがなの元へ近付き、彼女の手を取る。そしてそのまま生徒会室を後にしようとした。

だが、冥利が静止をかける。

「まあ、待てよ。どうして逃げるように立ち去ろうとするんだ？」

「お前の武器はスーパーボールなんだろ？ しかもさっき黒神さんが見せてくれたよりも、お前が使う方がすごそうだ。なのに何故、お前と同じ空間にいたくちやいけない？ それもこんな狭い場所だ。危険じゃないか」

「オレはこーして、武装解除してみせたんだけどな」

手を広げ、冥利はもう何も隠し持っていないことをアピールする。

「刺客を放ってくるようなヤツの言葉が信じられるか。オレや他のヤツらならまだしも、お前みたいなヤツを喜界島さんに近付けさせておくのは問題だ」

未来は睨みつけるように冥利へと視線を突きさす。ちなみに、もがなは「何このヒネてそーな子供。全然可愛くないんだけど」と空気を読まない発言をしている。

冥利は溜め息を吐く。それを静観していたためだがようやく事態の収拾に動き出した。

「まあ何にせよ、ただ手品の解説に来てくれたわけでもあるまい。何の用だ、雲仙二年生」

「用はないっちゃないが、あるっちゃあるな。まあ、用がなくちゃ来ちゃいけないーとか、そんな冷てーこと言ってくれるなよ！ おっ

と、「ご退場はまだ早いんじゃないか、土喰え？」

冥利の話し相手がめだかに映ったので、未来はもがなを連れて生徒会室を後にしようとしたが、それは止められてしまう。

せつかく上手く退避出来そうだったのに、と未来は冥利を睨みつけた。

そんな普段とは違う未来の敵対心剥き出しの様子に、もがなは二度見をしてしまうレベルで驚きを隠せない。基本的に未来は優しい表情をしているので、こんな敵意を放つ彼をもがなは初めて見た。

「おお、怖い怖い」

未来を見て笑みを浮かべる冥利は、一歩一歩めだかに近寄る。

「なあ、オレ達は学年は違えど、同じ十三組の仲間じゃねーか。仲良くしようぜ、黒神一年生。オレ達は怪物同士で、化け物同士で、似た者同士なんだからよお！」

さあ、手と手を取りあろうじゃないか、と身体全体で表現するように冥利は両手を広げた。

「いや実際、テメーが入学してきた時から思っちゃいたんだよ。テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなあ！」

「……でも、左右逆なんだろう？」

「おうよ。そっくりだから相容れねえ」

二人の視線は交差し、やがて背中合わせになる。

「人間が大好きなんだって？ 黒神めだか」

窓際に移動した冥利は窓枠に体重を預け、言葉を続けた。

「他人の役に立つため生まれてきたとかなんとか、大層なことを言ってるらしいじゃん。文字通りのお人好しって訳だ。そのお人好し加減で多くの人間を救い、多くの人間を改心させてきましたってか？ ケケケ、スゲーよ。スバラシーよ！」

ここで冥利の瞳に微かにだが殺気がこもる。

それを感じ取った未来が動くこうとするも、一睨みされ、動くに動けない。だからせめて、何が起ころうとも良いようにもがなを自らの背中に移動させた。

「だけど黒神、それはズルイぜ。テメーは人間のキレーな面しか見ちゃいねー。人間を好きだとたまう以上は、嘘も裏切りも、罪も醜さも、妬みも未熟さも、憎しみも争いも全部ひっくるめて好きじゃねーとズルイだろうが！」

冥利の声のトーンはどんどん上がり、次第に大衆に演説しているような声量になっていく。

「傲慢も嫉妬も暴食も憤怒も強欲も邪淫も怠惰も、人間の外せねー一部分だろうが！ 清濁併せ呑むのがテメーの主義ならテメー好みに改心なんてさせてんじゃねーよ！！ 今のテメーはランプを全部オモテに向けて神経衰弱しているみてーなもんだ。そりゃさぞかし無敵状態で楽しーだろうけど、そんなゲームに付き合わされる方はたまったもんじゃねーよ！！」

そついう認識もあるのか、と未来は感心した。

事、黒神めだかに関して、未来は同じ組織の人間として内から観察してきた。だが、冥利は敵対者として、そして同じ十三組の生徒として黒神めだかを観察していた。

だから、感心したわけであるが、今は気を抜いていられる状況ではないので、気を引き締める。

「オレは正義として悪を裁くが、正義が悪より正しいなんて思ったことは一度もねえ！ ルールで人を縛りはするが、それで人間がよくなるだなんて大それたことは思っ
てねえよ！！ ちなみに言うまでもなくオレは人間が大嫌いだ。だから当然ちゃん
と大嫌いだぜ？ 優しさも友情も！ 愛も奉仕も！ 義理も平和も大嫌いだ！
それでこそ誰彼区別なく、正義の鉄槌を下せるってもんだろ？」

めだかと冥利。本人たちが鏡合わせのように左右逆の存在だと言っているように、片や人間が大好きで、片や人間が大嫌いである。重なり合うことは出来ないが、背中を合わせれば左右対称の出来上がりだ。

「なあ、人吉イ。テメーならオレの言うコト話わかんじゃねーの？」

生徒会室中に響き渡るように演説し終えた後、これまでめだかに付き合わされてきた人間 善吉に問う。

善吉は疑り深そうに言葉を返す。

「……さあ。どうだろうな、実際」

「上から目線性善説とかよー。実際、その聖者つぷりはヒデエや。聖者の理想に従えない奴は、イコール愚者ってコトになっちまう」

冥利は窓枠に預けていた身体を浮かせ、くるりと回転して自然な

動きで窓のカギを締める。

「テメーがスゲエのは誰もが認めるよ。だけどそのスゴさを他人にまで強要するなよ。人間に強要していいのは、みんなで決めたルールだけだぜ？」

めだかは冥利の言い分を聞いて、ひとつ息を吐く。

「どうやら二つの誤解があるようだな、雲仙二年生。第一に上から目線性善説などは善吉が勝手に言っておるだけで私は聖者などではないし、第二に――」

そこまで言つて、めだかが何かに気づく。

めだかの視線は下に向けられ、その先にはコロコロと転がる小さな球。

表情が緊迫したものに変わり、生徒会の面々に向けて声を張り上げる。

「貴様達離れる！ さつき、こやつがバラ撒いたのはスーパーボールではない！ 火薬玉だ！！」

そう、冥利が着て早々床にバラ撒いたのはスーパーボールではなく、火薬玉であつた。冥利が生徒会室の入口の引き戸と窓のカギを締めたのは、密閉状態での爆発を狙つてのことだ。

めだかの言葉にその場に居た者たちの顔つきが変わる。

「おっと、バレたかい？ ダメだなーオレつて、本当にダメだ！ 手品下手過ぎ！ だがまあ遅い。仕込みはギリギリ終わってる！」

冥利は両手から溢れるほどのマッチをいつの間にか取り出した。

今にも床に大量に転がっている火薬玉に着火しそうな勢いだ。

「炸裂弾『灰かぶり（シンデレラ）』。実はスーパーボールよりこっちの方がオレの本筋でな。一個あれば老朽化した壁ぐらいならユ―でブチ抜けるシロモノだ！」

その威力は言葉通り、音楽室と校舎の壁に穴をブチ空けている。実はあの時の蹴りや殴りにはこの『灰かぶり』が使用されていた。未来の背中から冥利を見るように緊張した面持ちのものがなが口を開く。

「密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすまないよ」

高貴ももがなの言葉に続く。

「そうだ！ 子供っぽい脅しはやめろ！ 悪ふざけにしても度を越している！」

ニヤリと顔を歪ませる冥利。

「テメーらニユースとか見てねーのか？ ダッセエな。最近のガキは何考えてつかわかんねーんだぜ？」

「チツ」

やはりこうなったか、と未来は舌打ちした。彼の視線の先ではめだかが冥利のことを止めようとしている。

だが次の瞬間、冥利は火薬玉を着火させ、生徒会室はもの凄い爆音を鳴り響かせながら吹き飛んだ。

第10箱

ガラガラ、パラパラと瓦礫が床に落ちた音が鳴り響く。さきほどの爆発で生徒会室の内装は吹き飛ばされ、ボロボロになっている。割れた窓ガラスから砂塵が外へと放たれ、次第に視界が確保される。とは言え、生徒会室に人の姿はなかった。

「いつつもどーりの、普通普通」

確かに生徒会室には人の姿はないはずなのに、少年の声が聴こえてくる。その声が聴こえてくる辺りからメキメキと何か撓しなる音が聴こえ、その下から木の板が蹴飛ばされて誰かが這い出てきた。その者は、埃を吸いこまないために上げていた襟を下げる。

「ケツ！ 風紀委員会特服『白虎』スノウホワイト ダンプにはねられてもへっちゃらだっつー触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だ」

瓦礫から這い出てきた少年 雲仙冥利はいきなり自分が助かった理由を独白し始める。炸裂弾に『灰かぶり（シンデレラ）』と命名していた振り仮名といい、どうやら彼には厨二病の才能があるらしい。実年齢の十歳ということを考えれば当り前のことかもしれないが、将来が心配である。

「ド深海で作業する潜水艦とかで使われている素材なんだが、重くて動きづらいのが難点だな！」

そのような重い制服を学園生活で着ていられる冥利は、彼自身と言った通り怪物で化け物なのだろう。とてもではないが普通の人間には真似できない。

冥利は制服に着いた埃を叩き落としながら周りの状況を確認する。

「それにしても思ったよりも被害が小せえな。そりゃ校舎全壊とまではないかなくても、この辺一带消えてなくなってもよかったはずなんだが」

未恐ろしい子供である。

口ぶりから察するに一步間違えていたら人を殺していた可能性が高い。

「まあ、それを考えるのは後回しにするか。まずはお前らだ。まさかさっきの爆発で生き残ってるとはな。これでもオレも命がけだったんだぜ」

ケケケツ、とニヤける冥利の視線の先の廊下には、爆発で制服の背中の部分がボロボロになって露出している未来と、その未来に覆い被せられているもがなの姿だった。

「だが考えれば副会長様はオレを最初から警戒してたし、それに入口に近いところに居たしな。そのジョーちゃん助けるくらいワケねーか。その代償に自分がボロボロになっちまってたらお姫さまを守るナイト失格だけどな！」

そう、未来は爆発する寸前に入口の引き戸のカギを開け、もがなを押し倒すような形で廊下に出ることに成功していた。だからこそ助かったわけである。

「ふう……」

一息吐いて、未来はボロボロの身体を起き上がらせて、無理矢理

覆い被さっていたもがなの束縛を解く。

「あ……え？ あ、あの……」

「大丈夫。オレは大丈夫だから」

気が動転しているもがなの頭をそつと撫で宥める。大丈夫とは言っている、背中に負った火傷や裂傷は視線を逸らしたくなるほど酷い。だけれども、未来の声色はその怪我の痛みを感じさせない。

「で、でもその怪我……あたしのせいで、あたしをかばったせいで……」

どうしようどうしよう、と錯乱気味に目を白黒させるもがなに、やはり未来に優しい言葉をかける。

「今のオレは生徒会副会長（仮）なんだ。ほらこの通り、背中の怪我也すでに治り始めている」

その言葉を証明するように未来はもがなに背中を見せる。

「えっ！？ どういう……！」

さすがにほとんど治っているわけではないが、さきほどもがなが見た時よりは裂傷の一部だが確実に治癒していた。この勢いならば、二・三日ほどで完治してしまうのではないかと疑ってしまうほどの治癒速度だ。

未来は納得のいかなそうなもがなから冥利へと視線を向ける。

「ところで雲仙風紀委員長。一つ訂正がある」

「あん？」

「オレは副会長ではない。副会長（仮）だ！ 大事なことなので間違えてもらっては困る」

あくまでも仮入部。次の止まり木に旅立つための休憩地点ではない。この場所を気に入り、居場所にするかはまだ決めていないのだ。

「オイオイ、そんなのどつちでもいーじゃねーか。そんな細かいこと気にしてたら将来禿げるぜえ？」

冥利の返答を聞いて、未来は訂正は無理そうだと思った。だから次の言葉を続ける。

「それと」

その瞬間、周囲に圧倒的な存在感が撒き散らされた。

冥利は身構え冷や汗を流し、未来は少し遅かったかと内心反省した。だが言葉を続けることは止めない。

「そこにいるの危ないよ？」

咄嗟に身構えた冥利であったが、それと同時にその小柄な体躯が横に水平移動し、ダンブに跳ねられたような勢いで壁に突っ込んで行った。

「ダンブにはねられてもへっちゃらな制服なら、私が本気で殴っても三発までなら大丈夫ということだよな！！」

さきほどまで冥利がいたその場所には、何故か髪が真っ白く染まっていたのだが右腕を振りかぶった状態で存在していた。

制服は背中だけの未来よりも全身に渡りボロボロで下着が露わになっており、かろうじて生徒会長の証である腕章がまだ付いている。めだかと未来の視線が交差する。未来は一瞬その迫力に気圧されそうになるが、無理矢理笑顔を作った。

「ご苦労だった、土喰副会長（仮）。私だけでは皆を守り切れなかったかもしれない。感謝する」

かけられたのは労いの言葉。

もしや攻撃を仕掛けられるのでは、と疑ってしまうほどの迫力であったので、未来は覚悟していたが安堵した。めだかは正気のようにだ。

「いえいえ、さきほどもその壁をぶち抜かれていった風紀委員長に言ったのですが、私は副会長（仮）ですから。会長の補佐はお手の物ですよ」

「……そうか。すまなかった。私の判断ミスで迷惑をかけた」

「いや、いいですよ。それよりも、オレなんかに構うより黒神さんには先約があるでしょう？」

未来はつい先ほど新たに穿たれた穴に手のひらを向ける。

その先には脇腹を押えながらも立ち上がる冥利の姿があった。

「立ち上がれない振りでもしていれば、許してやれるかもしれないかったのに」

「……ケケケ、冗談！ 痛くも力ユクもねーっつーの！ ノーダメージだよボケ！」

一目今の冥利の姿を見れば、その言葉が強がりだとわかってしまうほど冥利の身体にはダメージが通っていた。口から血が吹き出され、立ち上がることもすら俣ならないほどだ。

それでも冥利は立ち上がる。

己が信念のため、信条のため、正義のため。そして風紀委員を背負った長として、立ち続けなければならない。

風紀委員は正義。ゆえに正義と敵対する者全てを取り締まるために。

「ふふ……フハハハッ！ あー駄目だ。あれは完全におかしすぎるよー！」

右膝を立て座った状態で未来は目の前で繰り広げられている戦いを目の当たりにしている。

まさに人外。冥利が怪物やら化物と言っていたことを納得していた。

あまりにも馬鹿馬鹿しいのだ。あのスーパーボールや火薬玉を用いて戦闘を繰り広げる冥利の戦闘力には目を見張るが、それよりも馬鹿馬鹿しいのはめだかの戦闘力だ。

冥利ですら常人には辿りつけないほどの何かを感じるのに、それを軽々と飛び越えてしまうほどの何かをめだかは持っていた。

屋内ということもあり、スーパーボールは縦横無尽に四方八方か

ら襲いかかり、その中に紛れ込まされた火薬玉はやはり対処しづらい。だけれども、めだかには全ての攻撃を避けていた。

絶対にあり得ない。人外……その言葉すらもめだかを表しきれなかった。

言うなれば力の塊。これ以上に今のめだかを評する言葉が見つからない。

その力の塊は、力任せに全てを薙ぎ払っていた。

「そんなに大笑いしたらダメだよ！ 傷口が開いちゃう！」

「ああ、大丈夫だって。さっきから言ってるけど、今のオレはあそこにいる黒神めだか率いる第98代生徒会執行部副会長（仮）なんだって。だからこれぐらいじゃ死にはしないよ」

「それでもダメだよ！ もしも先輩が入院になんてなったら嫌だもん！」

気の動転が治まってから、もがなはずっと未来の怪我のことを心配し続けている。

未来がいくらもがなのせいではないと言い含めても、それを受け入れてはくれない。終いには今ののように目尻に涙を溜めている次第だ。

これには未来も折れざるを得ない。

「わかったよ。でも、傷口がどうか言ってもらえない状態になってるんだけど、どうしようか？」

「え？」

未来ともがなが会話している時も戦闘は止まるわけではない。当

り前のことではあるが。

スーパールボールと火薬玉では自分がすり減るだけで埒が明かないと理解した冥利が、切り札『ストロングボール鋼糸玉』を切ってきた。

『鋼糸玉』とは読んで字のごとく鋼の糸をボール状に纏めたモノで、投げると糸状になり相手を拘束する、雲仙冥利の切り札である。それが投げられた時、めだかはスーパールボールと認識して避けなかつたために、動きを封じられてしまった。

「黒神さん！」

思わずもがなは叫ぶ。

「ま、オレたちは逃げる安定だわな」

「なんで！？ はやく黒神さんを助けないと！」

未来の言葉にももの凄い勢いで振り返えるもがな。

だけれども、未来は黙って立ち上がりもがなをお姫様だつこの形で抱える。

「ちょっと、離して！ 黒神さんが危ないんだよ！」

「いいから黙って運ばれる。オレたちがここにいる方が黒神さんの迷惑になるんだからさ」

言うのが早いか、未来はもがなを抱えたまま校庭にいた善吉と高貴の元へと駆け寄った。

二人が校舎から出た瞬間から、校舎が軋み出す音が聴こえだす。

「やっぱりね。オレたちが邪魔で黒神さんが力を出し切れて無かつ

「ただな」

未来が黒神めだかを観察してきて、あの程度の拘束ではめだかを止めきれないという結論が出ていた。

であるのに、めだかは動くことはなかった。

なぜなら邪魔者がいたからだ。めだかが動くには鋼系を引き千切るか鋼系が絡む校舎を無理矢理引きづるしかない。鋼系を引き千切らないところを見ると、その選択肢はさすがのめだかを持ってもらえないようだ。

だったら、残された選択肢は校舎を引きづるしか無いが、それをしたら校舎が倒壊する可能性がある。もしも倒壊したら生徒が生き埋めになるかもしれないが、今は放課後。生徒会役員以外はこの校舎に残ってはいない。

だから校舎内に未だ居た未来ともがなのことが気がかりで動けなかったのだ。

善吉が他の生徒会役員に何かを問いかけているが、静かに事態の収束を見守ろうとしている未来はその言葉を聞いてはいなかった。

目の前に映る光景が十三組同士の戦いであり、それを観察せずにはいられなかった。
ジュウサン

すでに特別になんて興味は薄れ始めている。

「……先輩、土喰先輩」

「んん？ ごめんごめん。なに？」

「土喰先輩はどうしますか？ 生徒会を辞めますかってヤツですよ」

善吉が真剣な顔で問う。

それに未来は笑い混じりで返す。

「ハハッ、辞める気は全然ないね。こんなにも面白いんだ。もし生徒会を辞めたら、オレは風紀委員会にでもいかなくちやならん。せつかく、人間関係も築けてきたことだし、二度手間はごめんだ」

「そうツスカ。やっぱアンタはわからねーや」

「みんなで行って来ると良いよ。黒神さんを止めるんだろ？ それもまた見ていて面白そうだ」

未来は動かない。

傍から見れば、背中の怪我のせいで動けないと思えもしくはもない。現にお姫様だつこで運ばれてきたもがなも含めて善吉たちはそう思った。

だが、未来は動かないのだ。

生徒会執行部に仮入部している身としては、こういった一致団結して心を通じ合わせることは何故だか未来には出来なかった。

何が理由なのか未来自身にもわからない。

めだかの元へ駆け寄り他の生徒会の面々の背中を未来は眺めるしかなかった。

喜界島ればーと？

全面戦争……それは少し大げさすぎるけど、風紀委員会と生徒会執行部との信念の相違から発生した衝突が終結して少し時間が経った。

そのイザコザにあたしは巻き込まれただけなので、何がどう言う経緯で黒神さんと風紀委員長が戦わなければならなかったのか、詳しく知らない。

けれども、それとは別にあたしは知ることになった。十三組ジュウサンの異常性を、そして黒神さんのことを。

騒動の中、人吉君は言った。黒神さんから人格をはがせば、ただのチカラの塊でしかなくて、もしも生徒会を辞めるのなら今がその時だって。

その言葉はすぐに理解できた。目の前で行われている圧倒的な暴力。あの容姿端麗、成績優秀で完全無欠な黒神さんの怒り狂った姿とても同一人物には見えなかった。

だけど、あたしに助けてくれと頼んでくれたのは黒神さんだったから、あたしは黒神さんの傍に居たい。そう率直に強く思えたから、その時取った行動は後悔なんてしない。

でも……、

「本当に大丈夫！？ 背中痛くない？ 保健室一緒に行きましょうか!？」

通常業務をいつもと同じようにこなすこの人 土喰先輩にだけは手を合わせたい気持ちでいっぱいだった。

「……またか。すでに今日、その系統の言葉は5回目だぞ。アレ以

降から数えるに127回目だ。何度も説明してるけど、背中のはもう塞がってるし、まったく何ら心配する必要はない」

口ではああ言ってるけど、絶対に痩せ我慢してるんだと思う。

あの時はあたしも気が動転していたし、あんなに速い治癒速度なんて見間違いないだろう。あたしに心配させないように痛みを堪えてくれているに決まってる！

「そんなの絶対に嘘だよ！ あたしのは全然心配しなくてもいいから、保健室行こう？ ね？」

「いやだから本当に完治したんだって」

先輩は苦笑いを浮かべたまま仕事を続けるがやはり信じられない。どう考えても一週間やそこらで治るような怪我ではなかったし、先輩は黒神さんではないのだ。黒神さんは騒動の翌日には本当に完治していた。心配してあたし自身が確認したから間違いない。

それは黒神さんだから可能なことであり、常人が同じことをしてみると言われてもできないハズだ。

「なら、確認してみるかい？」

あたしが疑り深そうな顔で先輩の仕事姿を注視していると、先輩はおもむろに上着を脱ぎだす。

これにはあたしも焦らずにはいられない。

「あつ、ちょ、白昼堂々生徒会室で制服を脱ぐなんてダメだよっ！」

以前、鬼瀬さんに向かって水着だけになってもいいか訊ねたあたしがいうのはお門違いかもしれないけど、それでもあの時と今とで

は状況が違う。

なんというか、直視できないのだ……男の人の裸を。そんなもん部活で見ているだろ！ と言われるかもしれないけど、そのときはプールなんだもん。プールでは水着が正装。だから大丈夫。

論理としては間違っているかもしれないけど、あたしの中ではこれで筋が通っているのだ。阿久根先輩は……まあうん。あたしが言っても聞いてくれないと思うから半ば諦めている。

「じゃあどうしたら証明できるのかな？ それとも納得してくれる？」

「わ、わかりました！ 納得します！ だからちゃんと制服着てよ！」

「それは良かった」

あたしの言った通り先輩は脱ぎかけていた上着を着直したのを見てホッと胸を撫で下ろす。本当に脱いでいたらあたしは今日一日土喰先輩のことを直視できなくなっていたかもしれない。

ううう、ここがプールなら良いのに。

先輩が書類を片づける作業に戻ったのを確認して、自分も予算関連の書類との格闘に戻ることにする。

ありがとうございます、先輩。

あたしを守ってくれて、本当に感謝してるよ。

いつか、この感謝の気持ちを返すことができれば良いと思った。

第11箱

七月十四日。十七日に終業式が迫っているということもあり、箱庭学園の生徒たちの間では夏休みに想いを馳せ、浮かれムードが蔓延していた。

そんな中、理事長からの目安箱への投書でめだかと未来は理事長室まで呼び出されていた。名目は風紀委員会とのイザコザについてだ。

それぞれが緑茶を口に一口含んでから話が始まる。

「雲仙君との小競り合いは大変でしたね。理事会も彼の正義やりすぎには手を焼いていたものですから、正直助かりましたよ。箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください」

どうやらこのいかにも好々爺然とした不知火袴理事長は、風紀委員会との騒動で破壊してしまった校舎について叱るわけではないらしい。むしろ、冥利やしすぎの正義に歯止めを刺したことに感謝している。もしかしたら、校舎を破壊してしまったことで、生徒会執行部を解散させてしまうのではないかと考えていた未来は内心安堵した。もっとも、あの騒動の翌日には校舎は元通りになっていたわけがあるが。

理事長の言葉を受け、めだかが口を開く。

「礼にはまったく及びませんよ、不知火理事長。それより、私としてはお孫さんの制御をお願いしたいものですな。恥ずかしながら彼女にはしてやられっぱなしでしてね」

理事長の孫とは、苗字から分かる通り半袖のことである。あの無尽蔵な胃袋を持つ小柄な少女である半袖は、時折生徒会室に襲来し、

友達である善吉を強引に攫って行くものだから、残った善吉の分の業務を他の生徒会メンバーが肩代わりすることが何度かあった。

他にも半袖は色々とやらかしているが、不思議と憎まれないキャラクターをしている。

「ははは、無茶言わないでくださいよ、黒神さん。袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々、君の幼なじみの人吉君くらいですよ」

「……確かに」

理事長の苦笑に同意するようにめだかは嘆息した。

「さて……それではさっそく本題に入りましょうか」

コトツ、と理事長は湯呑をテーブルに置いた。

「本題？ 今回の呼び出しは風紀委員会についてのことではなかったのですか？」

「ここまで特に口を開く必要はないと未来は感じていたが、これにはさすがに疑問を口にするしかない。

「ええ、目安箱に投書してまで君たちにこうして足を運んでもらったのは他でもありません。黒神めだかさん。土喰未来君。お二人に折り入ってお願いしたいことがありますね」

「……お願いですか」

「それは恐いですな。あなたはあのお孫さんのご祖父でいらっしや

る。どんな無理難題をふっかけられることやら」

生徒会サイドは何か面倒なことを頼まれるのではないかと理事長の頼みごととやらを勘繰る。

「まあそう構えないくださいよ。なあと簡単なお願いなんです」

不審そうな二人に理事長は前置きを入れて、

「実は雲仙君は風紀委員長としての活動とは別に、私の主宰するプロジェクトに参加してくれていましてね。ただ彼は今度のことではらく静養しなければなりません。そこでお二人のうちどちらかに彼の代役をつとめていただきたいのです」

つまりめだかとの直接対決で負傷した冥利の代わりを二人の内どちらかにやれと言うことのようなのだ。

めだかがとある単語に引っ掛かる。

「プロジェクト……ですか？」

「ええ、私は便宜上、それを『フラスコ計画』と呼んでいます」

「それはいったいどんなプロジェクトなんですか？ オレも生徒会長も生徒会活動で忙しいので、理事長が詳しく説明してくださらないければ参加について考えられません」

「それもそうですね。では、黒神さん。君はどうして自分が優秀なのか 疑問に思ったことはないですか？」

「……………質問の意味をはかりかねますね。そもそも私は自分を優

秀だなどとうぬぼれたことを思ってはおりません」

理事長は笑みを零す。

「ははは、謙遜することはありませんよ。隠さなくたっていいんです。君は明らかに異常なんですから！ もちろん、土喰君。君もその異常の部類に入りますよ。でなければ、そもそも君までこの場に呼んだりはしません」

「……でしょうね。まさかこの場で正面切ってそんな言葉を浴びせられるとは思いませんでしたよ」

未来は言われるまでもなく、自分が異常であると自覚していた。その方向性はともかく、自分が他人とは違うことを理解している。それゆえに彼は居場所を求めている。

「土喰君は理解が早くて助かりますよ。では、どこか不満げな黒神さんのことを話しましょうか」

理事長は未来からめだかへと視線を映し、お茶で口を湿らせてから話始める。

「足捌きで分身する。新聞の内容を細大漏らさず記憶する。フルマラソンを二時間フラットで駆け抜ける。書の道を三カ月で極める。十代において赤帯を巻く。獰猛な獣をひとにらみで屈服させる。関数計算を暗算でする。水の上に立つ。校舎を素手で破壊する。どれひとつとっても人間には到底不可能な行いです」

自分が知らなかったためだかの偉業もあり、未来は改めて自分の隣に座るめだかの顔を見た。

圧倒的な存在感。未来自身や、対面に座る一つの学園を牛耳る理事長ですら霞んでしまう。だが、その外観はあくまでも少女のものであり、先に理事長があげた偉業を彼女が成し得ているなんて一目見ただけでは思えないであろう。天才……とまでは思われそうではあるが。

「これは才能とか資質とか、そういう低次な話をしているのではありませんよ。人体では物理的に！ 筋肉量的に、脳構造的に、解剖学的に不可能なのです！！

そのありえない不可能なことを、しかし当然のように実行する君は異常であると言えない！ そう、君の為すことは偉業ではなく、異常なのです！！

そして、そもそもひとりの人間が大衆から98%の支持を得ることなど、群集心理の統計学からいってありません。そこに人格など関係ない。図抜けた優秀さは多数決では排除されるのが当たり前なのです。極端な話、君がそうして生徒会長をつとめているという事実が既にひとつの異常事態なのですよ。

通常では勿論！ スペシャル 特別であろうとなしえない！ アブノーマル 完全に異常の領域です！！」

ここで未来は少し前に行われた生徒会選挙を思い出す。

確かに彼女の支持率は98%であり、その数字が異常であると改めて認識した。

そんなめだかはやれやれといった風に言葉を返す。

「……………これは随分と買いかぶられてしまったものですな。私の為すことなど、恵まれた生まれにおける、ただの鍛錬の結果に過ぎませんよ」

「そうですね。優秀な人間ほど、己が優秀さを努力や運や環境のせ

いにしたがるものです。まるで言い訳をしているみたいだね」

めだかの返答に呆れ気味に、理事長は用意していたモノをテーブルの上に取り出す。

「では、黒神さん。ここでひとつ、老人の実験に付き合ってくださいませんか？」

取り出したのはワイングラスに入った八個のサイコロ。理事長はこの八個のサイコロを同時に振るよう、めだかに言う。

言われるがまま、めだかが八個のサイコロを振ると、どういう原理かその八個のサイコロはバベルの塔よろしく積み上がり、直立のタワーとしてその姿を現した。

理屈などではなかった。技術とかいうレベルではなく、その異常性はここに証明された。

そんな結果をめだかはジト目で眺めると、嘆息を一つ。

「すみません、昔からこうなんです。私がサイコロをまとめて振ると、なぜかこんな風に積み重なってしまうのです」

「……………いえ、それでいいんです。それでこそ……………」
…君を誘う意味がある！」

理事長の内心は驚愕で包まれていた。

全てが同じ目になるとか、そういう系統の結果が出ると予想していたが、まさか積み上がるとまでは予想の反中を超えていた。だがそれはむしろプラスの誤算であり、より一層めだかを『プラスコ計画』に誘いたくなっていた。

「土喰君もどうですか？ 君の結果にも興味が出てきました」

「……そう、ですね。オレも後で試してみようかと思いましたが、それも良いかもしれませんね」

めだかの結果を見て驚愕していたのは理事長だけではない。隣に座っていた未来もまた驚いていた。

アブノーマル
異常とは、ここまで人と違うのか。

これまで未来自身はサイコロを振る上で、意識して結果を確認したことはなかったし、自分の異常性を測る意味でも、サイコロを振りたくてしょうがなくなっていた。

積み上がったサイコロを掴み、まとめて振る。

「一・六・四・二・三・三・五・四か」

未来の表情に落胆の色が差し込んだ。

結果を見る限り、どこにも異常なところはない。全てが同じ数字目でも、ましてはタワーのように積み上がったわけでもない。

「ははは、そう落ち込まずもう一度サイコロを振ってみてください」

理事長の言葉で、もうどうにでもなれ、と未来は再度サイコロを振る。

「五・五・三・一・二・六・二・四」

やはりおかしいところがない普通の結果。

自らを異常と理解しているからこそ、複雑な心境である。

「なるほどな。これはなかなか面白いではないか。土喰副会長（仮）よ、もう一度サイコロを振ってみてくれないか」

「まあ……はい。わかりました」

めだかの口ぶりから察するに、彼女は何かに気づいたようだ。自分が共通点に気づけなかった不甲斐なさを感じたが、会長からお願いなので副会長（仮）として答えなければならぬ。

サイコロを振る。結果は、三・三・三・三・四・四・四・四。今度はさすがの未来も理解した。全ての目の合計が二十八。三回とも全てが、だ。

しかも、それだけではないと未来は理解している。それを証明するように、今度は二個のサイコロを同時に振った。結果は一と六。その後も何度か二個のサイコロを振ってみたが二と五、四と三……と、二個振った時の合計値が全て七であるという結果になった。

つまり偶数個振った時は七の倍数の合計値が出る。それを証明するように奇数個振った時に出る目は七の倍数とかそんな法則は関係無しにランダムであった。未来はこれまでサイコロを二個以上振った経験がなく、秘かに己の異常性に驚いた。

その未来の様子を理事長は笑顔で見届けて、

「では、話を続けましょうか。計画参加者にはそれ相応の報酬が用意されています。勿論、一介の理事長に叶えられる範囲で、ですが」

「ふむ。プロジェクトの概要についてだいたい理解しました。ですので、お話はそこまでで結構です」

「おお！ では黒神さん！」

理事長はめだかの言葉から、彼女が『フラスコ計画』に参加してくれるものと理解して自然と身体が前へと出る。

しかし、続けられたためだかの言葉は理事長の期待に添うものではなかった。

「いえ、申し訳ありませんが、ここで正式にお断りさせていただきます」
めだかはソファアールから立ちあがる。

「私は見知らぬ他人の役に立つため生まれてきました。私のささやかな能力の裏打ちはそれで十分です。そして、天才などいないというのが私の持論であり、そのプロジェクトはそんな私が協力できる類の計画ではないでしょう。お話自体は興味深く聞かせていただきましたが、雲仙二年生をリタイアさせてしまったことは別の形で償わせてください」

そこまで言って、めだかは理事長から未来へと視線を動かす。

「土喰副会長（仮）。貴様が理事長の頼みを聞くかどうかは自由だ。私はその意志にとやかく言わんし、私の意志を押しつけるつもりもない。好きにしまえ」

私はこれで失礼します、とめだかが理事長室から出ていくのを見届けて理事長が口を開く。

「……やれやれ、断られてしまいましたか。土喰君、君はどうしますか？」

問われ、未来は少し考える。

「そうですね、今回はオレもお断りさせていただきます。『フラスコ計画』でしたっけ？ 失礼ですが、オレにとってはそれに参加す

るよりも黒神さんの近くに居る方が有益なんですよ。それに、参考になりそうな人材がいらないようですよ」

では失礼します、と未来もめだかに続くよう立ち上がろうとするが、途中で脚に込めた力を抜くことになる。

「駄目ですよ、宗像君。今はその刃を納めてください」

いつのまにか未来の背後には日本刀を未来に突きつけていた少年が居た。

その宗像と呼ばれた少年は理事長の言葉に従わず、未来のうなじに向けて突きつけた日本刀を納めようとはしない。

「僕には彼が『フラスコ計画』に必要なとはどうしても思えません。そもそも黒神めだか自体、理事長が言うほど大した奴に見えませんでしたけどね」

顔は見えないが、未来は背後の居る少年に対しムツとする。

「それはなかなか心外な評価ですね。副会長（仮）として、君にはオレの事はともかく生徒会長に対する認識を改めて欲しいところだ」

「この刃を突き付けられた状況で君にできるのかい？ 黒神めだかの劣化でしかない君に？」

「できないことはないですよ。何せ、今のオレは副会長（仮）ですから。黒神めだかが生徒会長である限り、彼女以外の誰にも負けるわけにはいきません」

一触即発。彼らの間にはまさにその言葉が似合う雰囲気を漂わせていた。何が開戦の合図になるかわからない。そんな危うさが周囲を包み込んでいる。

理事長は溜め息を一つ。

「土喰君。たびたびの突然で申し訳ありませんが、君には二年一組から二年十三組へと所属替えをしてもらいます。問題はありませんか？」

「ありません」

「では、こちらが所属替えに関する書類です。よく目を通しておいってください」

未来は日本刀を突き付けられた状態で理事長から書類を受け取り、立ち上がった。それに伴い日本刀の切っ先が追尾してくるが、未来が動じることはない。

「それでは失礼しました」

理事長に向けて一礼してから、未来は理事長室を出ていく。バタソツと扉が閉まってから、宗像は理事長に疑問を投げかける。

「本当に彼は必要でしたか？ 黒神めだかならまだしも、僕はその劣化である彼の必要性を見出せません」

「ほほほ、何事も過程というものが大事なんですよ。完成に至るためには通過点が必要です。土喰君には申し訳ありませんけどね。で、君達はどう思いました？」

気づけば、理事長室には日本刀を鞘に納める宗像の他に五人の姿が確認できた。彼らは理事長の問いかけに各々の意見を述べる。それらの回答に理事長は満足したようだ。

「ふふふ。いやはや、君達にかかつちゃ、化け物生徒会長も形無しですねぇ」

第12箱

七月十五日。未来は朝から昨日目安箱に投書されたと思わしき苦情や陳情の処理に追われていた。

それもこれも十三組シュウサンの生徒たちが『フラスコ計画』に参加しようといきなり登校してきた結果ではあるが、未来はその辺の事情は知らない。というよりも、知る機会がなかったと言っべきであろう。知らず知らずのうちに十三組の生徒が登校してきていた。その程度の認識である。

「はあ……」

自然と溜め息が零れる。

十三組に所属替えしたことによって登校義務……もとい授業を受ける必要がなくなったわけである。しかし、普通ならそれを喜ぶべきだが、今回はそれが災いした。

授業を受ける必要がないので、副会長（仮）としてその時間を全て投書の処理に回さざるを得ない。現に生徒会長であるめだかはいつもそうしていた。休憩なしに働くことの大変さを身を持って知った未来であった。

視線を下に向ける。その先には一人の男子生徒の姿。夏場であるのに厚手のコートを羽織り、白目を向けて気絶している。今日は十三組の生徒に会うたびにこうなのだ。出会いがしらに問答無用で襲いかかって来るので、未来はこうして気絶させることにより学園の風紀を守っていた。

休憩なしの投書の処理と出会いがしらに襲ってくる十三組生。この二つの要因が重なって未来のモチベーションは下がり下がっていた。しかし、副会長（仮）として投書処理を止めるわけにはいかず、結果として溜め息を零すことになっていた。

「こんちわー」

次の投書の内容を確認しようとした未来の元に、一人の少女が声をかけてきた。

「不知火さんですか。今の時間一般生徒は授業中のハズですが？」

「あひゃひゃ。気にしない気にしない！」

未来が指摘すると、ペロペロキャンディー片手に愉快そうに半袖は笑う。

「ちょっと面白い話あるんだけど、副会長（仮）様聞いてかない？」

キャンディーを噛み砕き、半袖の口角がさらに吊がる。その様子を見て、また面倒事か、と未来はまたもや溜め息を吐くことになった。

半袖から面白い話とやらを聞いて、未来はこれからの行動について考えていた。

生徒会長であるめだかは善吉と一緒に『フラスコ計画』の全貌を見定めるために、実験が行われている時計台地下を視察に行くようである。さきほど会った高貴ともがなは半袖から未来と同じように面白い話を聞いて、置いてきぼりなのが嫌だったらしく速攻でめだかたちの後を追うために走り出した。

では、自分はどうするべきか？

自分を含め、生徒会メンバーが全員時計台地下の視察に向かってしまったとすれば、どう考えても通常業務の方が疎かになってしまふ。さすがにこれは副会長（仮）として未来は看過できない。

それならば未来がやらなければならない。

「あつるえー？ 副会長（仮）は助けに行かないのー？」

不思議そうな半袖の言葉。だが、そもそも未来は心配などしていない。

「別に行かないわけではありませんよ。一先ず緊急性の高い案件を片づけてから向かおうかと思ひましてね」

「それなら早くした方がいーよ。さすがのお嬢様も、あの場所は危険かもねー」

「なにやら楽しそうですね」

「まーね。そーゆー副会長（仮）も楽しそうじゃん」

「ええ。見定める良い機会ですから」

先ほどまでと打って変わってつまらなそうに走りだした高貴ともの背中を見つめる半袖に、未来は微笑みかける。

「では、オレは片づけなければならない業務がありますので」

「あたしも早くおじいちゃんのところ行かなきゃ。お腹も空いてきたしねー」

半袖と別れ、未来は緊急性の高い業務を脳内で選別する。今すぐやらなければならない業務は三つ。未来が全力で行動すれば全部合わせて二十分ほどで解決できるであろう。そのぐらいしか時間が

掛からないのであれば、先に行ったメンバーに追いつくことは容易だ。

そうと決まれば走る いや、歩く。正確に言えば競歩である。

こういうところでも律義に「廊下は走らない」を実践するのは未来が副会長（仮）であるからだ。ちなみに風紀委員との騒動の時も未来は校舎内を走ってはいない。……生徒会長は自転車で爆走していたりしたわけであるが。

すぐさま業務を片づけ時計台地下に向かう。

予定より二分ほど遅れて、ここまで来るのにあれから二十二分もかかってしまっている。未来が時計台地下に続く入口に到着すると、すでにそこには人の姿はなく、生徒会メンバーは先に進んでしまったようである。

「これは……」

未来は眉をひそめた。

どう見ても重厚そうなコンクリートが何かで造られた真ん中から両サイドに開く扉の右の扉の方が破壊され、誰もが気軽に通れるようになっていて。扉には硬いものを何度も叩きつけた痕があり、おそらく何者かが扉を壊したのだろう。

これは高貴がやったことなのだが、破壊臣時代を知らず基本的に温厚な高貴しか知らない未来には彼がやったことなんかわかるわけもない。

「修繕費にいくらかかるんだろうか？ もしもこれが生徒会予算から捻出されるとしたら、なかなか困った状況だ。せっかく喜界島さんのおかげで予算を抑えられていると言うのに。いや、これほどまでの破損状態から考えて理事会が費用を出してくれるのか？ 一般生徒は出入りしない場所だし、その辺りで考えておく方が良いか

もしれんな」

一度立ち止まり、破壊された扉について考えをまとめてから未来は時計台地下内部に入ることにした。

まず初めに見えてきたのは扉だった。扉を抜けて扉。しかしよく見れば、その扉がエレベーターの扉であることが分かる。未来が視線をずらせば扉の右側に操作するための装置が見える。見たところ、普通のキー配列のキーボードである。他にエレベーターを操作するものが見つかからない以上、これで操作するのだからと予想できる。

「ふむ。これはどうすればいいんだ？」

考えられるのは、単語を打ち込むことで操作したり、他にはパスワードを打ち込むことで扉が開いたりすることだ。

とりあえず未来は一通り試してみることにした。「開け」「ひらけ」「H I R A K E」など、思いついたそばからどんどん入力する。しかし、扉が開く素振りは一切ない。

これで単語の線は薄いと判断することにして、パスワード解除に向けて適当に入力を始め。

「何かをすれば必ずそうなる（……………）。異常とはつまりそういうことらしい。だとするならば、異常である未来にはパスワードを解除するなんて簡単なハズである。」

……………であるハズなのに、パスワードが解除される気配がない。何十回と打ち込んでいるのに、うんともすんとも言わず、未来は己の異常性の無さに愕然とする。サイコロの時もそうであるが、意外と未来のメンタルは弱いのかもしれない。

そんな軽く落ち込み気味の未来に声をかける存在がいた。

「そのエレベーターは地下十三階までの直通だけど乗りたいのかい？」

声に反応し、未来が振り返るとそこにはどうみても箱庭学園の生徒ではない私服の男性がいた。年齢は大学生ぐらいだろうか、首から十字架を提げ、カジュアルな格好をした髪の長い男だ。

「失礼ですが、あなたは？」

副会長（仮）として身分を確認する。もしも不審者であったとしたら問題である。いち早く排除しなければならない。

「ああ、ごめんよ。僕は箱庭学園旧校舎管理人を勤めている黒神真黒というものだ。決して不審者ではないから、そう身構えなえでくれたまえ！」

「黒神？」

知っている名前に未来は反応する。

「つまり君の上司である黒神めだかは、僕の愛しの妹ということさ！ 今後とも副会長（仮）として妹のことを支えてくれてやってよ、土喰未来くん？」

「あはは、妹さんにはこちらが助けられていますよ。ところでこのエレベーターが地下十三階直通とは本当ですか？」

「これでも昔は僕もこのエレベーターには世話になっていてね。当時と仕様が変わっていないなら地下十三階まで一直線さ」

この男、黒神真黒は一年前まで箱庭学園に在籍していた。とある理由で学園を中退しているのだが、口ぶりから言って真黒も異常で

あるようだ。

「さっきまで土喰くんが弄ってたのがコントロールキーで、漢字かな交じり文字制限なしの暗号を入力しなければそのエレベーターは稼働しない。しかも暗号は一度誰かがエレベーターを稼働させるたびに変更されるから困ったものだよ」

やれやれ、と真黒は溜め息を吐く。

「君がどうしても言うなら、僕がエレベーターを稼働させてあげても良いけどどうするかい？」

真黒の言葉を受け、未来は考える。

今回、時計台地下にやってきた目的はあくまでも視察なのであつたはずだ。めだかの性格ならば、彼女は一階一階じっくりと階段を下りて見ていくに違いない。未来がエレベーターを使用していたのは、そのめだかたちに追いつくためであり、地下十三階まで直接行きたいわけではない。

「せっかくのご好意ですが今回は遠慮しておきます。オレはこの階段で地道に生徒会長を追いかけすることにします」

未来は情報をもたらしてくれた真黒にお礼を言うと、エレベーターの右側にある階段を降りることにする。

真黒はめだかの兄であることを考えると、未来にとって大変興味深い。今回は普段見ることができないめだかの側面が見ることができるかもしれないのだ。どちらを優先するか言っまでもない。

未来の後を追うように真黒も階段を降り始めた。

「まあまあ、待ってくれよ。僕も兄として妹のピンチを見学しに行

こうと思っただけだ。旅は道連れというし、楽しく会話を弾ませながら一緒に行こうじゃないか！」

「オレは急ぐつもりですけど、その身体について来れるんですか？」

未来は真黒の上半身に目を向ける。

「ああ、これかい？ これは『フラスコ計画』抜けるときにちょっと、ね」

真黒が上着をたくし上げると、彼の身体にはいくつもの切り開かれた痕があった。

腎臓一個、左側の肺、肝臓の半分、胃の三分の一、心筋の二割、静脈五本、動脈三本。それらが真黒の身体には無い。

「日常生活もままならなくてね、おかげで学園も中退しなければならなかったよ。だからこんな弱い僕は、君が興味のありそうな話題を提供してゆっくり一緒に行ってもらうことにしよう」

未来は歩みを止めず階段を降り終える。どうやら地下一階は色々入り組んだ造りをしているようだ。真黒の話とやらに少し興味が出てきているので、ゆっくりとした歩みである。

「土喰くん。申し訳ないが、君のことを調べさせてもらったよ。過去と現在。そして、僕は君の異常性のことも解析させてもらった」

真黒からしてみれば、未来は愛する妹めだかに新しく近付いてきた男でしかない。それゆえに調べ、彼の異常性を持って解析した。それだけのことである。

しかし、未来の肩がピクリと反応する。それを真黒が見逃すはず

もなく、話を聞く気になつたと判断した。

「あー、オレの過去調べたんですか。なんの変哲もない普通な人生でしょう?」

「はは、確かに君自身は普通の人生だったよ。君が自分の異常性を制御できるようになったのは高校に上がる直前じゃないかな? 中学時代まで君の周りは散々な目に遭っていたようだしね」

「それについては少し後悔しているんですよ。オレが自分を理解しきれなかったばかりに、あの人が解決方法を押してくれるまで周りに迷惑をかけてしまいましたからね。だからこうして自分探しをしているんです」

丁字路を右に曲がる。行き止まりだ。仕方がないので反対側を向き進む。

「自分探しか……言い得て妙だね。そのための部活荒らしかい? そのための勉強かい?」

「ええ、可能性は少しずつ潰していかないと。オレの自分探しは消去法なんです。消して消して消して、そして最後に残ったのをオレ(・・・)と認めるんです。その時、土喰未来という人間は完成し、オレはオレとして一步を踏み出せる。そのために妹さんを利用させてもらっていることには申し訳ないと思いますけど」

「めだかちゃん、を……?」

ここで愛する妹の名前が出てきて真黒は思わず訊き返す。それも無理はない。『解析』の異常性を持つ真黒でさえ、めだかの異常性

のことを理解しきれていない。だから、未来の言葉を理解できない。そのことを未来は真黒の反応から察する。

「ところで、オレの異常性を解析したって言いましたよね？ それなら教えてくださいよ。オレ自身、自分の異常性をちゃんと理解しているわけじゃないので教えてくれると助かるんで」

「……教えたら、君の知ってるめだかちゃんのことを教えてくれるのかい？」

「別に構いませんよ。オレの望む解答を得られたらですけど」

真黒は自分の額から汗が滲み出ていることに気が付いていた。

『解析』を持つてしてもめだかかの異常性は未だ不明であるのにもかかわらず、未来はめだかかの異常性を理解していると言う。確かに真黒が未来の異常性を解析した結果、未来の異常性はそれを可能としているかもしれない。

本来なら、軽く会話を交えて未来の人となりを再確認するつもりであったが、真黒は唾を飲み込んでから口を開く。

「そうだね、簡単に土喰くんの異常性を表すなら、やり直しがきく自己完成だ。しかも、始めっからから完成間際で、最後のひと押しは自分の意志でやるかやらないか決められる。気に入らなければ、それまで積み上げた自分を崩し、新たな自分としてやり直す。言うなれば、鉄骨の無い鉄筋コンクリートのビルが始めっからある状態だ。それゆえに簡単に壊して造り直してやることもできるし、骨組みである鉄骨を追加してやれば、一つの建物として完成される。これが土喰未来の異常性……名付けるなら『プロミネングユース未完成』かな」

「まー、たしかに」

真黒の解析を聞き、未来は納得する。今まで自分の中では理解していたことであるが、言語化されることで自己を見つめ直す。

だが、その説明では少し足りない。

そんな未来の内面を感じ取ったかのように真黒は言葉を付け足す。

「だけど、土喰くんの異常性のおそろしいところはそこじゃないと僕は思っている」

歩みは止めず、未来は聴覚に神経を集中させる。

「自己完成。その過程において、土喰くんは初めに“キーワード”を設定しているね？ その設定したキーワードを忠実に再現するように自己を完成させる。だから君はそのキーワードを理解してないくちやいけないんだ。おそろしいよ……解析の異常性を持つ僕でさえ、めだかちゃんの異常性は未だわからないんだ。それなのに君は自己完成の片手間めだかちゃんを理解してしまっているんだろう？」

「ええ。ほら、今のオレって副会長（仮）じゃないですか。副会長は生徒会長の補佐をするべき役職とオレは理解しているので、黒神めだかに準ずる能力が必要でした。結果的にオレの為に利用させてもらっているわけだけども」

「どういうことだい？」

約束は守ったんだからそっちも守れ、と言わんばかりに真黒は疑問を口にする。

なので、未来は隣に歩く真黒に説明することした。

めだかの異常性について簡潔にまとめるところなる。

他人の異常性スキルを使いこなし、完成させることができる。

未来の異常性と似ているが、その性能には圧倒的な差がある。未来の異常性は、ひとつのキーワードについてそれをワンランク落としてをすぐに身につけることができ、さらにやり直しが効かなくなるが意志一つで、完成まで導くことができる。

しかし、めだかの異常性は、他人の異常性を120%まで完成させ吸収するものである。しかも未来のようにひとつという制限もなく、理論上は無限に他者の異常性を吸収できる。

そして、未来はそんなめだかが率いる生徒会の“副会長”をキーワードに置いているので、めだかの異常性をワンランク落とした完成度で扱うことができる。120%をワンランク落とし、100%。だが、めだかの異常性で身につけた能力は、発現段階でさらに未来の異常性でワンランク落とされることになる。結局は元の未来の異常性の再現率と変わらないが、それでも際限なく異常性を吸収できるので、自分をやり直すことがなくなり、未来としては効率が良くなって嬉しい限りだ。

その事実を未来から聞かされた真黒はアゴに手を当て真剣な表情で考える。

「それは本当なんだね？」

「それはご自身の異常性に訊いてくださいよ。オレの異常性を解析したのはアナタなんですから、真黒さんの解析が間違っていないければ、本当のことなんでしょっしょよ」

会話しながらも歩き続けていた二人の瞳にようやく階下へと繋がる階段が確認できた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4902x/>

とある未来の可能性

2011年12月11日03時57分発行